狂歌若葉集（天明三年 正月）

（序）

それされ哥はならの葉の名におふふることにもたちましり其外代々の御集にも誹諧哥と名つけて狂したること葉の花はふるき人々ももて興したまへりけらし中について栗のもとの名は水無瀬の離宮よりおこれりあかりたる代の躰には似されと其陰にあそひ其落栗ひろふ人代々にたえすしかはあれともおほくはかち栗のいひかちにしてあるはゑみ栗のうちゑむはかりおかしきふしをのみもとめては其さまいやしくあるはいか栗のいたくたけあるすかたをこひてはさせるふしなきとん栗となりて三栗の數はあれとも中にしふ栗のしふのぬけ出たらん歌はさゝ栗のいさゝかになんあるこのとし頃朝夕なれあそふ友かき何かしの花のまとゐくれかしの月のむしろにいひもて興する哥しはくりのしはく　にしてうちくりのうちもくつくもあらねはかのいなはのくにの女にはあらぬ栗このみのへつゝ東作もとの木あみ蛙面坊懸水ふる瀬のかつをなとかたらひつゝやつかれをあはせて栗のもとに五人つといてえりあつめたるされうたやつもゝちあまり折しも卯月のはしめなれはいやしける栗のわか葉集と名つけて梓にちりはめ侍るもけに遼東の豚にしてもとよりされ歌とのみおもひてそのあちもくひしらぬ身のせちにせをはやき栗なれははしけ栗のあやまちもありなんそれか中にも虫くひ栗のあちなきはこれ撰者のゑせ哥なから書肆のもとめもいなみかたく升栗のみつからはからぬとかおひ栗にとくにけ栗のにけ口は竈の神にかつけことせしかのさるかうの太郎冠者にまかせはへらんかし

壬寅のとし

はしめの夏　　から衣橘洲述

こゝに大なる栗の木ありかの力なきかはつの住吉の濱のみるめしなとの優なることは思ひもよらてさゝけの花はみしかくてみはなかし栗の花はなかくてみはみしかしとうたふもほねなき蚓の歌是狂詠のおもむきをえたりとその木のもとにまとゐしつゝやまとなからも唐衣きつしうをはしめて心あひたる友船のへつゝ東作あまのかるもとのもくあみ久方のあめん坊いそのかみふるせのかつを二一天作の五人あつまり言葉の玉の勘定もあひにあひたる歌かすのあつまるにまかせみるにしたかひてかきあつめつゝ名つけて狂歌若葉集といふ夫狂歌といへとも淺香の山かつ薪おへる棒ほとのよたれを花にたらし和歌のうらたなにゐさむらふもゐなからめしをたくかまくひをたてゝ月を愛するこゝろ言葉さまく　になんなりにけるあめつち鬼神はいまたしらすめに見えた夫婦いさかひをなためにかむしをくひたるかほはせをも笑はしめなすときのえんまをもよろこはしむるは狂歌也いにしへより其きこゆる人々多かれとやつかれもとより狂歌のことにあつからねはしることなし近きよとなりて我しる處をもていはゝト養と油烟齋なり卜養は油烟齋かかみにたゝんことかたく油烟齋は卜養かしもにたゝんことかたしといはんもかの歌の聖に譬るおそれをかへりみさるなるへしあゝト養なくなりにたれと狂歌のこと盛なる哉たとひえとかさなり日よみうつるゝも春秋の花紅葉あらは人の心の戯をたねとしてよろつのそゝろなる言の葉なから此集の名の

若葉のことくにしけらかんといふことしかりしかはあれとしらさるをしらさるとしていなひ侍るをいなひかたくてそのもとめをふさくことゝはなれり

置來識

狂歌若葉集　上

坡　柳

歳　旦

(0001) 雪ふりしやまけふこえて朝霞たつこそ春のいろはなりけれ
　餅搗家のうへに鶴舞ふ画に

(0002) 千とせをもかねてしること契るらし羽をのし餅の鶴のふる舞
　掃煤家に俵を蔵へはこふ画に

(0003) 蔵のうちはあきのかたより煤竹の千代をこめにてふさかりにせん
　梅如若衆

(0004) 雪のうちにすはり若衆の梅咲いて初て春としりもこそすれ
　薄如老女

(0005) 露の數珠すゝきのしらかすり合て野らは彼岸のはゝのあき秋
　石決明をたうへて

(0006) 老が身の齒にはあはひのかたおもひくはれぬ頬をふくら煮にして
　秋山　詠合杖弁當

(0007) 杖ついてわけ來し山のかひしきは紅葉にしかとつめた弁當
　子を抱なから蚊遣焚画に

(0008) 子をおもふ闇の煙か賎の女か夜のつるへき蚊屋もなければ
　相撲八枚の札うちて江の嶋へ詣る人に

(0009) 神のかこ佛のかこにのりの道相撲八まい江のしまいかた

椿　軒

春のはしめ人のもとにて蕎麥たうへて

(0010) 鶯のはつねき梅の花かつをかけてくひしる春のそはきり
　歳　暮

(0011) とれはまたとるほとそんのゆくとしをくるゝ〳〵　と思ふおろかさ
　八ッになる子の手鞠をつくを

(0012) 八ッとややはらよい子の春の鞠二百つくとも盡ぬ御壽命
　池　月

(0013) 月を手にとりはつしてはそこが毛の三本たらぬ猿澤の池
　西行の繪に

(0014) 柳かけ風みにしみつ笠ぬきてしはしとてこそ立とまりつえ

隣家梅

(0015) 梅のはな居なからにしてみてはとくかならす隣あるきをもせて

花街凰巾

(0016) 春の客くるわの凧のいとめてた松のうちをもしまひはりにて

玄關有梅

(0017) 花やかなものもう春の玄關におとりつき穂の梅はとれく

雛祭にひくにの白酒をのむを

(0018) ひな祭おもしろ酒のよいきけん一たひえめはもゝのこひくに

八月十四日月見んとてある別荘の物見をかりそめの哥のむしろしきけるそのひとつやとりにて牧猪奴のたはふれして風雅をさまたけの聲もかしましかりけれは

(0019) 花に風月にくまさか長はんやひよんなものみのまつよひのかけ

人にかはりて歳暮夢といふ題を

(0020) 寶船二三里さきにほの見へて初ゆめちかくなる床の浦

除　夜

(0021) 行年のかひく　しさや尻はしよりかけとりかなくあつまからけに

まりを給はりけるかしこまりを人して申つたふるとて

(0022) かゝりける哥も御禮にあけてみんあまりおそれのありやとおもへは

寄哥人戀

(0023) 忍ひつゝこそと契れはらんとはねてにはのあはぬ戀のうた人

寄儒者戀

(0024) 逢ふことはかたい哉その身にもまた似合ぬ戀をしのくたうまく

寄本道戀

(0025) おきわかれ脉をとりかねかねもきく藥の箱の明かたのとこ

寄鍼醫戀

(0026) 五里三里さすか鍼醫もうち侘ぬ富士より高き戀の山にて

寄樂人戀

(0027) 爰へこま宿かりやすとおもへとも人はいなとや思ふらん聲

寄大工戀

(0028) 床といへはいやとくめんの違ひ棚かねかはつれて日やりはん匠

寄猿樂戀

(0029) つれもなき舞臺に君か袖すりのまつとしらせて戀をしてわき

寄本家戀

(0030) きぬく　のけさ衣さへぬれの所作くる珠數玉やなくなみた佛

寄坐頭戀

(0031) しとけなき姿に思ひうちかけのいつかは權をつめてあふへき

寄神主戀

(0032) ふりたてゝきこしめせとは祈りしか人はつれなきやつの御耳
十五夜蝕四分半亥子丑の刻までかゝりけれは
(0033) かくるとて亥子もやられすみるもうし今宵の月の邪魔を四分半
萩をみ侍りて
(0034) むかしよりお萩と名にもつきしより隣しらすの花さかりかも
謡の名によせて歳旦
(0035) 老松の春は百萬年までとあまりあこきに祝ひつる龜
狂言の名によせて歳暮
(0036) 來る春をよろこふかきや今よりの末ひろかりにいはひこめほね
正月二日濱邊參のやとりにて芝浦早春といふ題を出せりときゝて
(0037) 芝浦やけふ哥人の乗合に言葉の玉をつむ寶舟
寄河豚釋教
(0038) すひ口のねき觀音のちからにて腹は佛や五體ふく汁
關路友
(0039) 旅衣ひもしきはらをたつか弓ともにひかれていそくきの關
瓜と茄子とによせて戀のこゝろを
(0040) 逢ことのならぬなすひや戀のたねやくそくのひしみはうりのつる
寄摺鉢戀
(0041) たれ故にみたれけるみそみちのくのしのふすり鉢われならなくに
寄花天狗
(0042) 羽うちはの風をあたこの山つゝき花のなかめにあきたらう坊
娘一人に婿八人
(0043) 娘ひとりまた八人のむこやまやのちは誰にかゆすり葉かたけ
鎌倉へ行盲人にかはりて
(0044) せめて目のひとつなりともほし月夜鎌倉やみの雪の下道
河首烏を毛いもといへは
(0045) 眞黒にはえた毛いものそのなりはゆかしうもありおかしうもあり
菖蒲團子うる商人にあたふ
(0046) この團子かをとて人のより政やほんにあやめのまへうしろから
ある禰宣雨中にうすひ峠を行とてころひけると人の語りけれは
(0047) うすひ坂雨にしりもちつくねきをかへしてよめはきねとこそなれ
雪のうた画ける扇子に
(0048) 鎌倉の名にふりにけるゆきのしたかくも扇子かやつかれの哥
萬歳のわらしのひものとけたるをさい藏のむすふ所かける繪に
(0049) 給ひ□わらしのひものとくわかに御万歳とのまちなさい歳
芳野花を
(0050) はなのうへにかけてはつさぬ人丸のめかねは雲とみよしのゝ山

去年より腹靡のいてきてなやみけるとき歳始歳暮の御作はと人のとひはへりけれは

(0051) 去年からよむところなきやうてきて只膏藥をはるもいそかし

寄料理戀

(0052) 逢たひとおもふ心のうしほによ我まつ人はいつかこんだて

寄柏餅懐舊

(0053) 供に世をさるか番場の柏餅くうにかへりし一とせの夢

雷灸といふことを

(0054) 天のはらなりて時〳〵　くたるなら灸すえてやれ雷のへそ

七　夕

(0055) 織女はこよひしめちかはらのうへに露のぬれこと

ある人住よしの繪に本哥あるをもてきてこのかたはらに狂哥をそへよとありけれと思ひもよらぬことゝいなひ侍りてのちよみてつかはしける

(0056) 本歌とはくらへかたそき行ちかひあはぬたとへや雷とすみの繪

□瘡を煩ふとき

(0057) 花のちるかさにはすこしまされともうき春風のふきてもの哉

大橋のあたりのたかとのにてほとゝきすをきゝて

(0058) 大はしのあるうへにまたかけたかとなくやなかすに行ほとゝきす

たぬきのけさ衣を着たる繪に

(0059) うちみれはちくとほうすになりかゝるたゝくたぬきのそのはら皷

福壽草に猫を書る繪に

(0060) 長閑なる春の風さへふく壽草くはほうはそはにねころんてまて

鱈を三本遠方よりもちて來れる人に

(0061) いつかまたわすれおきなん道のりもとを〳〵　たらの數も三番叟

ある所にて鱈の汁を出しけるとき

(0062) ねかはくはあのくたらふくたへてみんいま二三はいめうかあらせ給へ

かんたんの臺のものに四季折ふしのさま〳〵　景色をうつし哥そへて出けれは

(0063) しき嶋のやまといまくら言葉にてこれかんたんをくたく御作意

川中嶋の麥蕎振舞に下戸上戸うち交りてたうへけるに

(0064) 下戸は蕎麥上戸は酒のあらそひに腹ははる信顔はてる虎

寄餅神祇

(0065) つきせしな榊にかけたかゝみ餅うすめの神のきねかしわさは

あけら管江

年内立春

(0066) 年のうちに春はくれとも掛乞のせかむかきりはあらしとそ思ふ

川村何かし福茶をおくりけれは

(0067) 仕合もよう御山椒の口あきて笑ふ門より來る福茶かな
初春菜賣

(0068) 引あはぬやすき子の日そねきらすと千代のためしにめせや小松菜
初午近

(0069) 初午は睦月のうちにやゝ近しもはや幟のちをつけてみん
卜者看花

(0070) 占て見む卦の數は八重櫻さす花瓶もやきものにして
水無月のころ舟逍遥すとて

(0071) 袖ふるはたそやこかねの涼舟これそ橘丁のたをやめ
おなし月の晦日木あみか庵にてあるしももらうとも共に手つから蟹をやき
酒飲はへるとて

(0072) やくならはいくしにさしてみな月のけふこそ蟹のみそきをはせめ
八月十三夜

(0073) 染出來ぬこんやの月を詠むれは秋の最中はたしかあさつて
おなしき十五夜枝大豆をよめる

(0074) 枝まめのさやけき影をめつるとてはちけは口をあきのよの月
秋風破屋

(0075) ねころんて篠をつくゝ　詠むれは内へ半分雨のふる家
師走廿日あまり八日鳩をかへとてもて來りけるをかへすとて

(0076) かり金ときくさへそつと師走しまいやよならても八百のとり
節分の夜元帥より年中の邪鬼はらふなるたきものをたまはりて今夜侍ふか
きりむれかゝしめよとありけれは

(0077) たまはりしめてたきものは人よりもまつ我ひとりくゆらせてみん
歳　暮

(0078) けふといへはまゆに師走のしはくともくれろといふにとしはおしまし
西の久保木あみか庵にて芝浦のさかなてうしてあるししけれは

(0079) 御馳走のその海山もみへぬれはこゝらからしてもはや芝の戸
隅田川

(0080) 名におはぬあつまのはての都鳥白きは雪と墨田川哉
待乳山

(0081) 鰐口をならせは待乳山彦にとられてひゝくくはんゝ　喜天
淺茅原

(0082) 露をけさかれは淺茅かはらゝ　とちるやかゝみか池のみつかね
何かしの朝臣の家のむねに鷹のゐけるを人々祝して哥よみけれは

(0083) 段々にすゝむ御紋もかはらふき此屋かた尾の鷹のふのよさ
布　袋

(0084) お手元をちよいと彌勒の化身にてむかしからこの酒は好物

湖龍齋といふか俳優の似顔かきけるをみて

(0085) おもさしもかくやどうさのとき膠みなにたゝ　とほむるうつし繪
おさなき人小袖たてまつりかふるをいなみてきさりけれはかたはらに侍る
人ほうをゝ　といふをきゝて

(0086) 和子さまの御紋はしかも桐のたうさらはめしませ鳳皇のべゝ
祝あみた佛といふか角兵衞獅子のかたかきけるに

(0087) 正のもの正てうつせし越後獅子また誰あつてかうはかく兵衞
ある翁の八十になれるを賀して

(0088) いやがうへに猶いやそちのそのよけいたんとならすは千とせても經よ
寄春画祝

(0089) もう床もおさまりてよいきみか代はいまいく千世と祝ふまくらゑ

濱邊　人

芝浦早春

(0090) 海の景よいとや申す春駒の齒にまた足らぬ若芝のうら
河豚汁遠舊

(0091) 葱大根口藥ほとにほはせて遠音のひゝくてつほうの汁
身揚待夢

(0092) 身あかりにきのふも逢し夢人のほんにみえたらうつゝぬかさん
述　懷

(0093) 哥よめとまた澁ぬけぬ恥かきのへたは我身に生れつきつゝ
寄樂人戀

(0094) 君故にけふの試樂(しがく)ものらくらと還城樂のへひ遣ふなり
寄本道戀

(0095) 戀病をものやおもふととひ藥もりて人目にかゝる下手醫者
寄大工戀

(0096) 立まへに札を入ても落ぬ君まくらに塵のつもりちかひか
新酒早春

(0097) 飛鳥の鳥羽を出るよりおひてよく波をはしりの下り諸白
寄元結戀

(0098) わかれても互の心かはらすはもと結車のよりもあはなん
鴈連山

(0099) 天津空琴柱にたてる初鴈を十三峠にみるはめつらし
深更納豆

(0100) 門ならて夜半にたゝくは納豆のよくねているをおこす響か

きのさた丸

船松飾

(0101) 松立て雑煮にはらをこやし船しりくめ繩も匂ふはなの香
初午近
(0102) 細道のおくの祠の稲荷宮もふ初午もちかのうら店
鶯さそふといへる句題を
(0103) 春の日のなかしのしたに音信て鶯さそふ摺鉢のみそ
或人隣の笋をぬすみてたうへけるを
(0104) 笋のあまたはへぬるところてん盗て喰は心ふとなり
九月十三夜
(0105) まち謠うたへる聲をきくの頃雲まく出し後シテの月
豐年案山子
(0106) 豐年てごさそろばんのひまもなく八二かゝしをたてゝこそおけ
臍村初雪
(0107) 臍むらのずぼうとう至も過ぬれはかれし草津に雪つもりやま
時　雨　木名五ツ
(0108) きり(桐)もなくしくるゝ頃もみち(楓)かき(柿)日これか天氣にあす(檜)ならふかや(栢)
寄酒戀
(0109) 胸はいたみ袖は池田となりにけりまた逢ふこともなみたもろ白
寄俵戀
(0110) ちらと見し君に思ひをこめ俵大黒ならてふみつけてみむ
福神里通
(0111) 人めをはいつも頭巾にかくれ里數のこかねをまかきゆうの神
出替戀
(0112) つゝめとも色に出かはりする味噌のこき戀中ももはやあさつき
寄若楓戀
(0113) 若楓めたしの色も戀中にあき風吹は氣をもちせん
中直酒盛
(0114) 戀中のさめしをなほす鉗鍋は猶も思ひのつもる酒盛
目黒へ詣んと一軒茶屋を過ければ
(0115) これは諸國一けん茶屋の脇道を過て目黒へいそき□
目黒暮春
(0116) 粟餅をつき日ははやくめくろにてこり場にしめをはるそくれ行

ひともしの白根

寄春祝
(0117) 新玉の年のかしらに長き日に富貴のたねの芽をふくの神
山家早梅
(0118) 都迄みはやさん家の梅の花いやはやもはや是ははやさき

櫻

(0119) 咲みちていやかうへ野ゝ櫻鯛よきみところとほめる目の下

雪中借傘

(0120) 降出してからかさかりにゆきの中ものもうそうの聲もたかんな

寄紙祝

(0121) よろこひのはしにあらはす惠比須帋めてたいことのまいり三郎

寄土器戀

(0122) いつしかに君が心のうちくもり契りしこともうそのかはらけ

馬蹄

郭公

(0123) 郭公さつきはおのか時相場こゑをはかりにかけて鳴くなり

萩の盛に客をとゝめて

(0124) はきを見て通はともあれ落ついて露の情をくめの仙人

鶉をあまたかひし人の皆おちたるときゝて

(0125) おちたるは皆かひやうのふかくさに鶉なくなる跡の淋しさ

發句合に点せよとせちにせめられて

(0126) 十露盤の玉をつらねし句ゝなれは我てんさくのこめんあれかし

愛宕山眺望

(0127) まけた碁のあたこもけふはうちはれてそこに濱手のよくみゆるなり

寄願人坊戀

(0128) かくふかき思ひをみせのはんしものとくる心やいつと町なみ

寄地獄戀

(0129) にえかへりねたしとみるめかく鼻や地獄の釜のふたりぬるむ湯

寄山伏戀

(0130) ふとしたるゑんの行者の道なれは峯の岩かとふみつけてみん

七夕酒

(0131) けん酒にかちては指をおり姫のつもる思ひを打はらひけり

寄壁塗懐舊

(0132) 身のむかしなを思ひてはあら壁やぬる間の夢に打かへしみん

錦江

吉原花

(0133) 根引して老木はしらぬこのもとにいつも若木の花のよし原

日本橋月

(0134) 名におひてよくはれわたる日本橋江戸の最中の秋のよの月

雑司谷擣衣

(0135) きくのりの衣うつなり雑司谷ひゝくこたまの音も高田に

古　札

(0136) 煤掃にはき出されたる守札ちりにましはるかみくすにして
　　曉天開帳善光寺如來なれは

(0137) 挑灯の數は田毎の月更てあけやしなのゝ開帳の庭
　　寒中の笋のあつものふるまはれけれは

(0138) 寒中にたけのこのよな御馳走は世にめつらしと御禮もうそう
　　二月廿八日に齒の落けれは

(0139) 草はもえ木のめもはるの時なるに落はするこそ哀なりけれ

ぬけうらの近道

花

(0140) 雲と見しは春の日かめよ山風に匂ひは鼻をつんさくら花
　　葺屋町にて寄顔見世祝を

(0141) 積ものゝ山のかひより見渡は今そこかねの花ふきや町
　　十二夜月

(0142) さすかまた月に禮義の雲はれぬ鳩に三枝の十二夜の月
　　高田馬場にて十三夜を

(0143) 馬場といへは年よつたか田馬はなくてまたいと若き十三夜哉
　　酒をたうへぬるのち茶をたうへ侍るに茶碗の破はへれは

(0144) 酒のんて寢むけに茶碗われ人もはつちりとこそめはさめにけれ
　　寄彼岸櫻戀

(0145) 君か情あつさ寒さも彼岸より替りて緑の薄さくら花
　　枯野に轉變する繪に

(0146) まねかれて時もすかれ野はくちこそ尾花ともにうちほうけぬれ

北川卜仙

寄十露盤立春

(0147) よせさんのその口〳〵　へしめかさりあふてうれしきあら玉のはる
　　寄鯨曲尺戀

(0148) 戀死は鯨となりてものさしにつもる思ひのたけをしらせん

雲水無菴

十三峠といふ所を越るとて

(0149) 爪音のひくや木曾路のひつこ馬十三峠のらは大こと
　　湖遠く竹生嶋を見わたして

(0150) 竹生嶋ちんとむかふにみつうみやへんさい天かの一の風景
　　勢田の茶店に□休みして蜆のむきみを賞す

(0151) 矢羽勢からいかける風にむきしゝみむかて山こそ名のみなりけれ

(0152) 長はしをとり〳〵　にくふ勢田しゝみふりさけ見れは皿にもり山
ねものかたりといふ所はいつこそと馬夫にとへははやあとになりぬといふ
そこはなかれの少し有よしきゝて

(0153) 枕せん流もすこし有ときくねものかたりをみつにこそゆけ

西　瓜　　眉　長

(0154) たべ過すはしめに口の甘のか後は西瓜となへていふなり

けいせうなこん

(0155) 文竿といへる人世にめてた男といひもてさはくをきゝてよみてつかはしける
口くせにいふもめてたくかしこにて家さへとめる文のふんかん

(0156) はしめてもくあみた佛か庵をとひ侍るに芝の浦にてとりしましさかなをお
くり侍るとて
けふはまたお目にかゝりにまいるとておくるはもとのもくあみの魚

(0157) 來禽堂にまかりけるに家のうちに雀の飛入けれは
尋ね來るけふよりかくて家のうちにとひこむ鳥の跡やしたはん

商家歳旦　　本　重

(0158) 松竹のねうりや千代も千金の春のけしきを見世ひらきして

月前異見

(0159) 金遣ふ最中に月の甥のとらおは捨かたく異見しなの路

雪中婚禮

(0160) こん〳〵　のふりにし數も三々九度もれや雪のともしら髪まて

されぬ歌のむしろに粟燒の餅を出とて

(0161) 下戸ならはよしあし久保てあかるへし上戸口へはあは燒のもち

遠くの親類より近くの他人といふことを

(0162) 親類の遠江よりむつましくかたる出合はちかのうら店

本屋好酒

(0163) はかりなきものゝ本屋の樂みは帙をみたさぬやまとから酒

獵人能書

(0164) 獵人の鐵炮ならぬ筆とりて文字のあたりもはつささりけり

つはものも交はりたのみある酒盛に

(0165) おもふとち打より光の酒宴はわたなへやきやさかたまことぢ

商家歳暮

(0166) もしほ草かきたしかきつ十露盤の玉の春まつとしの湊は

風　車

寄猫春月

(0167) かひねこの猫なて聲を春の夜やかすめる月の鼠たつねて

寄猿落花

(0168) さるむこの心よいかにあらし山咲花嫁のはなをちらして

おほふねの乘よし

反古あまたいれし籠を見侍りて

(0169) かみあつめにあつまりまして籠のうちはあらゆる反古の大社かも

寄馬戀

(0170) あふ夜とてこゝろかさきへはしり馬戀の重荷も輕尻にして

樋口氏

御入内のありけるに國〻の諸侯より使者の登ぬる中にも取鳥侯の家臣行裝分てはなやかはれは

(0171) とりとりもふり込む奴立わかれいなはの使者はとりわけてよい

加茂競馬に行しに夕立して雷はけしく鳴けれは

(0172) 俄雨上加茂なれは鳴筈のわけ雷に逢そおそろし

東寺の駒井某かたより名物の眞桑瓜もらひて

(0173) 羅生門東寺から來た眞桑瓜つかみつくより鬼をしてやる

彌生の頃鞍馬へ行しに峰のかたに櫻のみえけれは

(0174) 鞍馬山天狗のすめる山なれはいかにもはなの高くみえける

祇園の二軒茶屋にて遊しに連の人酒にいたく酔て日くるゝ頃歸るとて

(0175) 連はたゝもりつふされて祇園から灯ともし比に歸こそすれ

竹中某か矢數射けるを見に行て大佛の茶屋へ立よりて田樂たうへけるに大勢の客にて燒もおほせす生やきなる田樂出しけれは

(0176) 田樂を少しあふりてくれよかしいかに矢數の日といへはとて

宇治へ行て扇の芝を見て

(0177) 取殘す扇の芝は頼政かほねを碎きし所なりけり

宇治の川邊をゆくにことなう腹のへりぬれは

(0178) むかしはるびいまは我帶のひ□夫は梶原これはすきはら

名月の夜今出川を通るに冷泉家の御館のまへを浄瑠璃かたりて行く人に逢て

(0179) 十五夜に浄るりかたる聲すなりしかもれいせい様のまへにて

和泉式部の寺に開帳有ける頃誘はれけれと障る事ありて申遣すとて

(0180) 不遠慮に男はどふも行れまし和泉式部の御開帳には

金春八左衞門か下女予か方の柘榴を取て歸けれは

(0181) 殘りなくむしつて歸る柘榴哉また金春は何をせしめん

人に弁慶嶋を調て遣しけるに代銀しらせよと言越しける手紙に書込て遣すとて

(0182) 御尋の弁慶嶋の代銀は御状のはしに書付て□
　　或人無間の鐘といふ浄るり本を讀なから中食喰けるに
(0183) おそろしや無間の鐘の浄るりを讀て見てさへひるめしをくふ
　　寄山伏戀
(0184) つれなさに落る涙はいらたかの珠數もさらく　祈る甲斐なし
　　寄碁戀
(0185) 生死を相碁と契る中手さへ人目のせきに立切れつゝ
　　寄薙刀戀
(0186) いかにせん刃向もならぬつれなさに袂の涙ひるまきもなし
　　寄神道戀
(0187) きらはれて高間かはらそ立にけるすかる袂をはらひ玉へは
　　幽靈をよめる
(0188) よしやすかた消すは有とも何かせん腰より下の無き身なるもの
　　寄三弦戀
(0189) 紙駒のばちもなにかはいとふへきかいろうひとも契る添ねに
　　寄箒戀
(0190) 玉章の數はあくたと積れともはきすてらるゝ身こそつらけれ
　　寄鎧戀
(0191) わたかみの引合をも祈らまし袖におもひを忍ふ草すり
　　四月朔日
(0192) けふよりは夏をまふけの坐敷つき此ついたちを春のへたてに
　　弓削何かし予に扇くれとて
(0193) 夕顔の花はなくとも一もとのつまくれなゐをおくり給へや
　　予か方より扇三本遣すとて
(0194) くれとある御諚ももたしかたけれは贈る扇も是三ッにして
　　雁　金
(0195) かりかねもりの字にみえて渡る哉誰證文をかけて來ぬらむ
　　去かたへ夜行しに打寄て鰒くひけるに
(0196) てつほうを打寄てくふ夜食には先行灯の火ふたはつしぬ
　　伊藤某土佐ふしの浄瑠璃をかたり三味線もよく彈事を聞及て望むとて
(0197) 能廻るちよつかいならは土佐ふしをさあひき給へ猫の皮にて
　　誰烟草入ともしらすくし形なるか落て有しに
(0198) 忘れ置く主はたれともしらぬ日のつくしかたなる古たはこ入
　　予か齒を痛て打臥けるに世話やきなる老女來て柳の楊枝に梅若と書てくは
　　へよと進めけるに流石にもたしかたくて其通にいたしぬはや痛の和らきた
　　るらんと彼老女せはしく尋ねけれは
(0199) 梅若と書し柳のしるしにて實つかのまに痛わすゝ

予かうら隣にて夜もすから大内鑑といふ浄瑠璃を語りけるに

(0200) 葛の葉のうらにてかたる浄瑠璃はしのたのもりて聞へやすなり

題饅頭

(0201) まんちうと源氏に有し名を呼もけにはた白く中　にして

陳壽三か本草の會に度々みえねは

(0202) 壽三うそうそを月夜の郭公またもかけたか本草の會

鶉振舞んと約せしかたへ行しに客多くてうつらを出よりはやくなくなりけれは

(0203) 御馳走は身にしむほとも給すして深草山か鶉なくなる

藪もちし人に竹をもらひに遣すとて

(0204) 藪いしやの御所望申さは竹は物ほしかりと思ひ玉わん

去かたにて鶉をかけものにして双六打けるに予か勝たれとうつらを出さゝれは

(0205) すこ六のかけものにせし其鶉ゑそらことにはなさしとそ思ふ

鐵炮打たる事もなき人〳〵　言合せて城外へ出ぬ今日獲物あらん事の覺束なくせん場の橋を渡るとて

(0206) 鳥一羽打得ん事も覺束なつれてせんはの橋はわたれと

筒口を通りて

(0207) いかめしく獵と出かける鐵炮の筒口をまつ打通りけり

斯初心の人〳〵　伴ひ出る事のおかしくむれ居る鳥の笑ん事もはつかしくて

(0208) おきなさい人か笑そ狩衣下手はかりとそ田鶴もなくなる

東武に趣きける頃近江の湖水をみやりて

(0209) こゝかしこ目とをくみえし八景はすきとあふみのうらかたにして

勢田の橋を渡りて

(0210) 勢田の橋是より遠き三かみ山北へむかではみえぬなりけり

薩陀山を行く人海螺のつほ燒をもてはやせは

(0211) 塩梅もよく御さつたのつほ燒てはらよし原と急く人〳〵

元日雜煮にむかひて古郷を思ひやりて

(0212) 古郷もけふの太はしかみならし今やくふらん餅好の妻

秋山何かしに京都細工の紙たはこ入取寄て遣しけれは

(0213) 千早振かみかた折のたはこ入錢くれないか只くれるのか

予返し

(0214) たはこ入かみに偽りなきものを唯正直にはらひし玉へ

寶生九郎か妻を失ひしと聞ける人傷の狂哥詠と望みしに

(0215) 妻うせて心くろうの寶生はひとりむしやくしやものおもふらん

駿河町より富士をみて

(0216) 安賣をするか丁とは聞されと富士の高根もみえ渡る哉

小山某二日醉しなから人の酒呑けるを見てまた呑けるに

(0217) 酒といへは逋川津の三郎よまたのみかけてりきみ出らるゝ
去かたへ行しに大勢寄て鰒をみて直段付る様子なれは

(0218) 鐵炮にちと引かねも有かとて皆打寄てあたりてそみる
渡邊某急なる用有て難波へ旅立しけるに

(0219) 鬼ならて別れとなれは片うでを切るゝやうにおもふ渡邊
さるかたへ行て料理したゝか給ぬ側なる人予は何十はいたへたると尋ねしかは

(0220) 十はいの二十はいのと夕めしも詰る所ははらに一はい
墨田川の邊にて狂哥書付るとて

(0221) 鼻紙のはし場に哥を殘さんと書は矢立の墨田川哉
白金の邊は時鳥の多かりけれは

(0222) 所とて白金岱の郭公聲をはかりにかけたかとなく

渭　明

葬　花

(0223) 朝顔は雲のうへなる色みえていともかしこきちよくにこそさけ

寶　船

(0224) 春の風ふくの神達帆をあけて聲たからかに唄ふ舟哥

寄念佛戀

(0225) 帶紐を解てねふつのかねことは後の世かけて契る成けり

寄辨慶戀

(0226) 衣川きてみるたひに錦木はたち往生に朽はてよとや
夫婦いさかひするをみてよめる

(0227) 女房か角たしや爺(とゝ)か棒出してたゝけとわれぬかたつむり哉
としの初に雜巾をいたゝきしと夢に見てことの外いみおもふよしなれは賀して

(0228) 雜巾をあて字に書は藏と金とかくに是はふくとみへたり
七月七日人のもとをたつねけるに家賃のつもりけるまゝにおひやられけるといへれは

(0229) 宿代の銀かつもりてかさゝきやたなはたく　とたてられにけり
熱海の湯亭を半太夫といふものうちいひたるやうあるさまにけく　しくみへ侍れは

(0230) 挨拶もかたりいてたる半太夫けに江戸ふしの風情なりけり
梅澤を過てこふといふ所にてやすらひ侍りけるに茶釜の下けふりていふせかりしを

(0231) 茶の下をあまのたきさす薄煙かふときく社ゆかしかりけれ

三嶋より沼津に行道のほとに大なる釜有て半は土にうつみ侍るに是なんいにしへの富士野の御狩によねかしきたるといふ

(0232) 此かまをこの里人はほらぬなり頼朝さまのごもつ成とて
鞠子の里にて

(0233) くれかゝる鞠子の里の草の上に落てはけぬる風の白露
桑名よりくわてとよみし星川朝氣日永の里を過はつ野ようない川水淺くかちわたりせしに衣はみなぬらし侍りて

(0234) 橋あれはぬれぬはづのを所詮なくようない川を歩行わたりせし
草津の驛を過て矢はせの道に行んと心さして問侍るに西のかたなるみちをさしをしへぬそこをは矢倉といふよし申侍れは

(0235) 矢倉にて矢はせの道を問ぬれは弓はり月の入かたをさす
宇治の興聖寺の堂の前に道元入唐歸朝の時持來の胡椒の木侍りいとめてたく枝葉今にさかへ侍りしをみて

(0236) 小性まてつれて歸朝の道元は嘸からしりにのられたるへし
近江の國石部の驛を過行は蜈蚣山手にとるはかりになん侍りしを

(0237) はいわたる程にみゆれはむかて山さして遠くはあらしとそ思ふ
草津の驛より俄に空かきくもりゆくてにはたゝ神おとろく　しくやうく
にしのきて臍(へそ)村も過つゝ森山のさとにやとり侍るに雨猶やますしてふしとをおかしいふせかりけれは

(0238) 雷にへそ村などはのかれてもたゝもりやまぬ宿そわひしき
寄貝戀

(0239) まてはこぬ此身は獨とこふしのかたおもひなる夜半を赤螺
熱海の濱邊を錦の浦といひ山よりなかるゝ川をいと川と申侍るよし聞けれは

(0240) ひとすちに浪のよりくるいと川に錦のうらをつきあはせけり
日蓮上人袈裟掛松

(0241) 日蓮のけさかけられし松なれは臼や杵には切れさりけり
腰越かた瀬より江の嶋にかちわたりして

(0242) かちわたりさしくる汐は腰こへてかたせにおひし物ぬらしけり
箱根の山中より雨いたくふりてやう〳〵　三嶋につきて舍をもとめはへりぬこゝは三しましほりとて染物よきと申侍れは

(0243) 山あゐの出はなの雨のつよくして袖を三島にしほり社すれ
富士のたかねをなかめ侍りて

(0244) 六月のもちにきゆてふ富士の雪吹くる風は氷おろしか
吉原の茶店にやすらゐはへるに此あたりには見なれぬさまの女のなまめきわたれは人々もいと興し物しけるまゝに名をとへはふちとこたへ侍る

(0245) そのはたへ雪のお山の立すかたはたちはかりとみへししほしり
かけ川袋井のあたり過ゆくとて

(0246) 長旅のゑりにおもたく懸川の頭陀の袋井邪魔に社なれ
江州滋賀のさと屏風か浦を見侍りて
(0247) 荒にける都の滋賀をかくさんと屏風か浦や霞たつらん
祇園の御社の前なる茶店にて田樂のとふふをきること女の手業いと珍しく
人々興して立より侍る
(0248) 田樂の法師ならねとこれもまた神の御前のはやしものなり
久我殿の築地の内に柳の枝たれてみへしに
(0249) ひたゝれし柳の枝のしやく長く御たちのうへにかふり社すれ
天王寺鳥居の額は小野道風ふるひ筆とて名にたち聞へはへりぬ
(0250) 近代のものとはみへぬふるひ筆日本流にあらぬとうふう
濃州ふるの坂をこゆるとて雨ふりけれは
(0251) ゆたむせてよくそみのまてきたりけるけふはる雨のふるの坂道
江州志賀の浦竹嶋雄琴の浦なと見侍りて
(0252) 竹嶋の音を吹そへて松風も雄琴にかへよ琵琶の湖
粟田口の店にて
(0253) 一すいの夢を結はむあはた口ちろりにひとつ酒のかんたん
日くれて船かゝりせしに船子ともはゑ(袁)んけ(玄)ん道をあらそひて夜ひとよかし
かしけれは
(0254) 船の上にろをよふ聲のしきりにてはてはいかりをおこし社すれ

出來秋の万作

亥とし歳旦
(0255) 的の繪の霞もすこしたつか弓はるのけしきとなるは弦おと
寄弓歳暮
(0256) はま弓にとしのくれ竹よくためてあすから弦をはるのことふき
舟中鯰といふことを
(0257) 引あけたよつでの鯰とりもあへすじしんおさへた船のゆらつき
目鏡に月をみるといふことを
(0258) 月影をうつすめかねの玉兎額の波にかけてこそみれ
ふとしの下りへ蛙の飛つきたるを
(0259) 股のから下りもなかきふんとしにかはと飛つくかわつ三郎
市川海老藏忌とむらふ
(0260) 市川の名のみのこして行水にふたゝひうつせ親のかけきよ
夏川船團扇
(0261) このあたり夏は中洲とさしよりて船のうちわの風そすゝしき
秋山弁當杖
(0262) 山こえて杖つくゝ　とさひしきは弁當はこのあきの夕くれ

鳴子村常圓寺の糸櫻み侍りて

(0263) 糸櫻さかりなるこの田舍にも供引つれて人そより來る

牛牽天神

(0264) ひく牛のはな繩なかき春の日に遊ひつくしはあむらくじかも

寄花笑

(0265) 春風にふつと莟もふき出て□けんよし野ゝ花笑ふらし

許由の繪に

(0266) 筆あかもおちくる瀧を手にうけて耳の洗濯する墨画哉

山中聲色

(0267) 風ひゝく山の尾のへの聲色を松にいはせてきく五郎哉

寄柏餅懷舊

(0268) 五月雨ふるからおのか袖ぬれてむかしの人のなつかしはもち

寄化物祝

(0269) 千代よろつ世をふる狐よくはけて人はしら髪ととしよるのとの

かけまの月

(0270) またとしも若衆さかりの十三夜月のかけまのはれてよし町

戀

(0271) つゝめともおもひ染木の色に出て身はほと布の糸にやつるゝ

蛙面坊

年内立春の日餅春侍るを

(0272) 餅ついて粉をふるとしの内庭にけふ寒明の春はたち臼

安永十丑の正月十一日藏ひらきに節分なれは

(0273) 春風もふくはうちへといり豆や鬼はそとなる倉ひらきして

雪中に若菜摘小娘の繪に

(0274) はつ春やそのとしもまた若菜つむ齒も白妙の雪のふり袖

雙立道連といふ題にて

(0275) 双六の道つれひとりふたこ山明て箱根とかへり來るはる

正月七日濱邊　人亭にて海邊七種といふことを

(0276) 七種にするこきよせてうち海や船もとうどのとり楫のおと

或人新吉原遊女の言葉をいれて廓梅といふをよめといひしかは

(0277) 閨の戸に薫りくるわの梅の花あれ見なんしより咲んしたから

寄花笑

(0278) きさきよく笑らへる花の顔はせをよろこひたりと見てはいふ王

玄關に梅ありといふ題にて

(0279) 先祖から幾代繼穂そ玄關に知行とり毛の鑓梅の花

胡　蝶

(0280) 春の野ゝ霞の屏風やれたりと見へてひらつく蝶番哉
卯月の初つかた鎧の渡にて時鳥を聞侍りて
(0281) 時鳥來たる鎧の渡場に卯のはなおとしさきかけて啼
或人初松魚のはしりをかふてふたりにてさしみに作り喰ふたりといふをきゝて
(0282) はつ鰹ふたりさしみてくふたりと耳にはかりはきいたからし酢
山中竹子
(0283) たかとりもしらすにおきなさひ竹の子は山中にかくやおひける
さつま芋をうる商人肩へ灸点をおろしたへといひしかは膏盲の□へ点おろしやりて
(0284) まつ肩のてむひん棒をおろされてすへるきう州さつまいもうり
あむゑいの初霜月賀邸先生の許にて新宅のひらき侍る時櫻の造り花を送りけるに讀て遣しけるつくり花のことを新成の花といへはそのこゝろをよみ侍る
(0285) 幾千代かふる霜月の門ひらき祝ふてこれをしんしやうの花
氷□（おこし）といふ名物の干菓子を賣る人へよみて遣しける
(0286) 日を重ねいくせかはやる店上やうまきあしろの氷おこしは
歳暮
(0287) 待春の□一刻の千金を少しかりたき年のくれかな
獵人戀
(0288) 鐵炮のたまの契りにうちとけて臥ゐの床やうれし獵人
或夜の明方に箱崎町を通り侍る折ふし迷ひ子を尋る人あまた來りしをみて
(0289) ふた親の心は闇にまよひ子を呼ふ夜もあはてあけむ箱崎
いまた武州矢口を見ぬ人道をしらぬとて駕籠をかりて行をみ侍りて
(0290) ひと筋も矢口の道はしらま弓いてみむとてやかこをかり股
或人錫のとくりをとり出し酒のあるやとならしみてかんをし侍るを
(0291) かむせんと三番そう〳〵　ふつてみるすゝのとくりのとつはひや酒
ある人狩野守信の下繪にて幸阿彌か蒔繪したる龜の盃を出し一首よめとありしかは
(0292) 盃にてうと一はい守信か繪は萬年の龜のかう阿彌
墨画松
(0293) 腰はりのかみさひにける床の間に墨繪の松の千代をかけもの
愛宕春
(0294) 吹ちらす風はあたこの山櫻にほひも高きはなそめにたつ
寄葵車戀
(0295) 葵草ひいてくるまをまつみかもおもひかけたる人とみあれに

へづゝ東作

萬歳梅のはな見るところの繪に

(0296) 萬歳のみはやす庭に春告る梅も一本のはしら暦歟

浦賀にて

(0297) 西東うら賀は船の關すまふうみをまはしのしめくゝりよき

駿河の國に遊ひける頃原の驛にて

(0298) 浮嶋かはらふ路銀も盡はてゝ三國一のふしゆふなたひ

野夕立

(0299) おとこなら出て見よ雷に電横に飛火の野邊の夕立

薺賣るもの金拾ふ所の繪に

(0300) 拾ふてもかくしかたみの金花民をなつなの惠みある御代

常陸よりうつせし梅よくつきたりとて人の見せ侍りけれは

(0301) 常陸より根こして植し梅なれはよく筑波山はやま茂山

内藤宿の傀儡を人のよめといひけれは

(0302) 我か里の君を草花になそらへてほめはかうしうかい道の花

松江侯の壽藏萩野氏よりもとめられけるに

(0303) 鶴の觜千とせ見まくはり植るうなひ松江の君かことふき

安永やつのとしの秋剃髪し侍りける世のほたしもたらぬ身にも空の名殘こそといひしやさしき心にはあらて年頃の本意とけてまろき頭になりにけるにもなを好物の味は忘れかたなく剃髪の吟いかにとなと問ける友達の許へ申贈りける

(0304) 髪をおろし大根のりのみちほとけのそはやちかつきぬらん

避暑船の坐頭の水游く所の繪に

(0305) 坐頭の坊見るめも波をおよきつく名も川一といふ涼みふね

甲州にて酒折の宮へ新に道つくよしきゝて

(0306) 文に武にいく代かねつる瑞籬の道も新につくはにいはり

梅花若衆ににたり

(0307) へたつかぬ花の枝ふり若衆ふり梅のすけとは實の事てなし

なか月十三夜橘洲ぬしへ始てまかりて謠の題にて八嶋をよめる

(0308) 十五夜と錣引あふ十三夜月の影きよ雲のみおのや

五音相通甥なる兒に遣す

(0309) あかさたなはま矢が來たら調へておこそとのほも悦むていや

ふしみ町玉屋にて福録壽の讃

(0310) 御そんゝ　のあたま勿論このやとは尻の長ひも福の神なり

草庵初冬

(0311) 草庵の菊は酢和合にむしられて北風寒く冬は來にけり

菊地叔成のもとにて梨子の白あへにて酒たうへて

(0312) 梨花一枝あめよりむまき御肴は類ひもなしの花の白あへ

親王家の御使の前にて柚を盃にへき入てはやくゝ　とあるに

(0313) 盃に伊豫ならぬ柚の匂ふかないさかたふけん桁のかすゝ

桑原のぬしの許へ山田の主の來りて歸るさに予に代哥よめとあれは

(0314) はるゝ　と築地をさして足曳の山田か杖とたのむ桑はら

加藤孟竹か許にて松枝君と萩野先生に會す

(0315) 長かれと鶴のはき野の名によせて君まつ枝の千とせ祝ん

淺草御坊報恩講に南林坊かたるま漬にて狂哥乞はる

(0316) 參詣は霜をふむたるたるま漬よるひるかふる彌陀のおん徳

大膳亮好庵へまいりけれは剃髪を祝ひ給はるに

(0317) 丸つはの撫心よきあたまなり御合口ともおほし召きみ

用事ありて中橋はりかねのもとへ行に時刻遲けれは元山王にて

(0318) ゑひてもと山王の遲櫻見つゝ日あしもさるに下つた

修禪寺宿の湯にて

(0319) やまひにもてふとあひ鎌ふたまいり丈夫になつておりる箱の湯

狼谷といふ所は火葬所なり或人酒飲にかたはらより冷酒は毒なるよしをい

ひて呑さりけれは

(0320) 燗せねは毒しやの口ののみて共狼谷のひやはのかれす

夜鷹述懐

(0321) 立君のつらき夜なかをまつか名ににによたか蕎麥のあちきなのみや

薄老女に似たりといふことを

(0322) 花薄老のけそうににたる哉顔にしはすの月ならね共

藤振袖に似たり

(0323) 咲あまる振袖垣の藤のはな誰ゆひ入を松の下蔭

青木万作の許にて画讃をよみけるときすゝきに蒟蒻をさしたる繪に

(0324) 菎蒻のさしたる味はなけれともちとはなすゝき招く友とち

中の町の櫻

(0325) 中の町是も寶の山櫻手をむなしくは誰も歸らし

泉町五陵かもとにて山下金作その外六人はなしけるに六哥仙を一首にと有

けれは

(0326) おのこまちりよりあふ友に僧ふたり心やす秀酒もなり平

寥昭か一周忌寄誹諧懷舊といふことを門人のもとめに

(0327) この道の杖はしら形おれしより誰も歎をする五色墨

八月十五夜空少しくもりけるにかやは町はりかねをとふに夫婦ともにかは

らけ町へと僕の言けれは本意なくて

(0328) 盃のかはらく町はうらやましうちくもりてもふたりみる影

釣のはなし出しにはりかねのぬし予は嫌なりといふに

(0329) 和田の原八十嶋かけておれはいや人にはつれよ沖の釣舟

茅場町樂庵にて蕎麥を打といふに

(0330) めむ棒のうち治れる御代なれやぬいて鎧の渡しもるそは

雪の居續といふことを

(0331) 筒井つゝ居續つもる花代は雪の重荷をおひにけらしな

寄哥人戀

(0332) 厭はるゝ身は恨めしき鏡山いさといふても顔は　ぬし

寄儒者戀

(0333) 集つる螢にこかれ雪に消おもひにしみの家と成ふみ

本所焉馬か老父身まかりける九十二歳なり

(0334) 高砂の松も力や落すらん相生町の友におくれて

述　懐

(0335) 糸きれて隙に成たるてこの坊この樂もてむからく

辛丑歳暮石町月三師の許にて越年

(0336) 願いしちくとくは御禮申さねと御影て安樂こく町の暮

天明二壬寅年歳旦

(0337) こち吹て今年も首をふる法師はりこのとらの春を迎て

佛師歳暮

(0338) 種々薩陲くれ行としを鳥佛師かる地藏顔なす焔魔顔

三谷堀にて遊客の舟を見て

(0339) 筥枕火繩にくゆる思ひこそあはまくほりの猪牙の夕暮

木あみへ訪ひけるを内子留守なり

(0340) 肝心の智惠の内子は御留守にて亭坊馬鹿に成給ふ哉

甲府柳町といふ所に遊ひもの有と聞て

(0341) 誰か子そ色にみたるゝ柳甲ゆきおれと言親はなけれと

儒學を業にてかたき人吉原へはまりけるかつねに日たけて歸りけれは

(0342) 吉原も思はゝなむの遠か□ん棠棣の花晝歸る儒者

獵人願後世

(0343) 鹿を逐ふ獵師の申す念佛は後世に□の山をみぬため

木あみ夫婦つれにて江の嶋かまくらへ詣るををくる

(0344) 旅枕かまくらかけてめをとつれ鶴かおかたの手をひきかやつ

もとの木あみ會はしめに船松飾といふことを

(0345) 浪の上も子の日の野邊に似たり舟ともに緑の松をひくしめ

むつき末のよか彌左衞門町會初午近といふを

(0346) 手鞠より遊ひつゝきて小娘のまつ初午もひとふたよ三夜

物へまかりけるに赤はね橋にて剃髪せしことを

(0347) 飛ありく身は赤羽の橋の板そつて浮世のわたり安さよ

尾張に遊ひけるとき矢嶋氏餞別にあつさにまけぬむさし坊といひ贈られけれは

(0348) よしつねに思ひ出さは武藏坊御状のはしにちよつと一筆

兩國へ涼にまかりて

(0349) 酒はみな河となかれて涼舟たゝめをおとろかす斗なり

塔の澤温泉にて荒堀氏と別れけるにかまくら一見し給ふよしの給ひけれは

(0350) 温泉もきいてめてたき鶴か岡龜かやつれもみへぬ江戸入

竹馬行列

(0351) うはか餅五ッ立なる行列は日もたけ馬の伏見とまりか

反橋落葉

(0352) 住吉の橋のそつたに神無月□からからちる木の葉哉

もとの木あみ

子日生醉

(0353) 醉ほれて野へにねの日の小松原さめても酒のあとや引らん

鶯

(0354) 谷の戸を引あけ方の鶯はまた一聲のあともしまらす

吉原花

(0355) 中の町の塩竈櫻うつし植て見つゝとほるの大臣もあり

飛鳥山花

(0356) 川ならぬ飛鳥の岡の花の瀬にふちをかきてはなくる土器

暮春三味線

(0357) くれて行春三味線のさほ姫か花のすかたをひきもとめこん

しらみの哥百首よめる中に更衣

(0358) 賤の女かしらみの布子夏のきて恥をさらせり天のかく山

おなし中に卯花

(0359) 山賤かしらみ垣ほの卯の花はうつろふとてやこほれかゝれる

普請場時鳥

(0360) 鐵槌もてうとてつへんかけて打釘もきいたり山時鳥

山中笋

(0361) 山姥かやまふところにそいふしの一よふたよにそたつ竹の子

町　立

(0362) 商人の相場とともに夕立のあかりをまちの日和みてゐる

しらみ百首の中に女郎花

(0363) 女郎花なひくにつれておち虱おちたりとても人にかたるな

名月蕎麥

(0364) 雲の帶ゆるめてくはんもりかへも三五二八の月の新蕎麥

川越戀

(0365) 九十川くよく　ものをおもはせてなと逢ふことのかた車そも

馬士戀

(0366) 馬かたは我からしりの身をくひて戀の重荷はつけあくむなり

出替戀

(0367) われ鍋をもちしふたりか出替はもゆるおほひの朝な夕めし

茶摘戀

(0368) 戀中もいまははなれて後むかし茶よりもうきを身にそつまるゝ

牡丹花老人の画讃

(0369) 世をうしの角つき合もむつかしとすつる心はけにふかみ草

宗祇法師ぬす人にあひたる繪に

(0370) ちりの世をすつるまてとて毛筞の髭に心をとめきなるらん

わら筆書の琵琶の畫讃

(0371) 逢坂の關のわらふてかく琵琶の是も流泉たくぼく画なり

高縄といふ所にて鯛のうしほ煮をこしらへて

(0372) うしほ煮に名も高縄や御殿山したうつ浪のはなさくら鯛

傾城待間夫

(0373) うかれめの待に思ひを焚ましてにくらしゐ柴こる斗なり

寶舟船頭

(0374) 船長か片帆に風のふくの神たからからろの音のよきかな

獵人願後世

(0375) 鐵炮にねらひさためて後の世をたすかりう人と申念佛

草庵化猫

(0376) 草の庵はけるしり尾もふたまたにさけて浮世をよそにみけ猫

寄茶湯懷舊

(0377) 老らくの今は茶せんのほともへぬあはれふりにし我はつむかし

寄經師釋教

(0378) ひとはけに引むらさきの雲紙ものりのをしへの經師なるらん

卯月はしめつかたとしころの本意とけてすみた川のほとり何かしの寺に行てかしらおろし侍るとて

(0379) けふよりそ衣は染つすみた川なかれわたりに世をわたらはや

おなしとき郭公をきゝて

(0380) 我としもほとゝきすきぬさらはとてゝつへんかけてそりこほつなり

信濃ものゝ大めしをくふをみて

(0381) しなのもの大めしくらふそのはらをはゝきゝならはあんじもやせん

月に題のたわれ哥に点あへてと求にいなみかたくて

(0382) あたら月の狂歌のわきへ朱書してまつかな恥をさらしなの秋

別荘に竹の垣ゆひまわすとて

(0383) うきことにはなれ竹かきおりく　は一よふたよのふしどゝもせん

盧生か画をかり侍りて久しくかへさてのち度々とりにこしけるとき

(0384) かり枕榮花の夢をおこせとの使にあはぬいひわけもなき

傍にありける付木を本の枝折にし侍るとて

(0385) 跡さきに心つけ木を枝折にていわうの花の言のはも見む

錢一ト すちかり侍りて相をみてもらひてのちかへすとて

(0386) 難波江のあしを一ト すちかりしよりよしとて相をみつのうらなひ

狂哥袋を水引にて柱へかけるとて

(0387) 恥あへす蛙のたはれ哥袋はしらのつらへかける水引

かしらおろして佛の道に入ぬる人の尺八をこのみて吹けれは

(0388) あなたうと佛のみちにむかひちやふけ尺八のよをのかれては

しらみ百首の中雜

(0389) 筒井つゝいつもしらみは在原やはひにけらしなちとみさるまに

寄十露盤戀のたはれ哥の点を乞れはへりて其奥に書付侍る

(0390) 十露盤の玉の言葉にわりなくもかけそこなひし二一てんさく

金澤の閻魔堂にて磯山さくら盛なるころ

(0391) 閻魔堂旅の日記の帳付て花の色香をみるめかく鼻

櫻の花さかりなる頃小田に雁のゐるを見て

(0392) 花になをこしをぬかしてかへらぬは櫻かりとそいふへかりける

鎌倉を過るに九月の九日なりけれは菊の花を駕籠にさすとて

(0393) 四ッ手かこ猶酒手ませよはひませ千世いきつへときくの山みち

寄米春神祇

(0394) 立臼に米つきよみの神なれはまゝになるのもきねかならはし

麻布稲荷社頭會にねりかた神樂堂よりたはこの火こひによみてこしける返し

(0395) 神樂堂とむく　かちく　火をうちてひやろ火をやろ笛のねりかた

あしかなへかふりて舞ふ画賛

(0396) あしかなへ躍る扇子の手を出して仕舞のはては脉をみらるゝ

山法師のあかかりといへることを

(0397) あかかりの踏立られぬ岩角に猶あし引の山法師かな

陰　間

(0398) 身をうしと思ひつく間の鍋ならてかまの數く　かさねてそあふ

田植笠如月

(0399) 早乙女の植てしたいに行かけは笠も田毎の月とみゆらん

川向礒

(0400) 風の手にきこへきぬたの川向こたまは浪のうつにやあるらむ

錢湯戀

(0401) うき涙なかしあふたる妹背中たかいに湯屋のあかぬ別に
寄鍋眞木祝
(0402) 鍋の尻かけともつきぬ墨の江の松の落葉はめてたきゝなり
寄食焚神祇
(0403) あや杉にかけてはたらく木綿たすき米をかくゐの宮の朝ゆふ

狂歌若葉集　下

四方赤良

□□の心をよみ侍ける
(0404) 女郎花なまめきたてる前よりもうしろめたしや藤はかまこし
鰻　□
(0405) あなうなきいつくの山のいもとせをさかれて後に身をこかすとは
橘洲のもとにて障子のや（ふ）れたるをみて
(0406) やふれたる障子を立てはちさるはそれゆうふくな家のしまつか
雨原憲か樞をうるほしていたくもり侍ければ
(0407) さす板に雨のふるやのむねもりはかさはりの子のしるしなりけり
返　し　　耆山法師
(0408) かさはりの子ならはよしやむねもりもさしていとはし雨のふるやを
于蘭盆
(0409) かけとりのみるめかくはなうるさきに人にしのふのうら盆もかな
伊尹は俎板を脊たらおひて成湯に目見へし山かけの中納言は口腹のために世味をわする十能のひとつにかそへ一坐の興をたすくそれゆるかせにすへけんや
(0410) 客をみてなきなたならぬあしらひは料理にうへもなきり庖丁
日本橋月
(0411) 二千里の海山かけて行月もいてたつ足のにほむはしより
船饅頭
(0412) こかれよる船まむちうの名に立てこの川竹のよをふかすらし
鰹魚にゑひて
(0413) 鍋のふた明てくやしく醉ぬるは浦嶋か子かつる松魚かも
卯雲翁を下谷にとひて
(0414) 狂歌をは天井まてもひゝかせて下谷にすめる翁とはゝや
寄煙草戀
(0415) 埋火のしたにさはらて和らかにいひよらむ言の葉たはこもかな
寄灰吹戀
(0416) 灰吹の青かりしより見そめこし心のたけをうちはたかはや

神無月祖師の御影供に雑司谷にて扇をひろひて

(0417) 落たるをひろひゑしきのもち扇とる手おそしの御影堂まへ

章魚を肴に酒たうへて

(0418) 誰にそも酒をしひてや足あれと手のなきものそたこの入道

報恩講

(0419) 西東まいる人々御中にひらく御□の御報恩講

等思両人戀

(0420) 片身つゝわけし思ひの中落はいつれかつほの骨付もなし

花

(0421) 咲なはと我おもほへし犬櫻とを山よりの尾をふりてみむ

布袋和尚牛にのりて唐子のひきて行画に

(0422) 寺子ともひきたる牛のつのもしはいろはにほてい和尚なるかな

飯田町鴈奴のもとにやとれりけるに隣のからうすの音におとろかされて

(0423) こほゝ　とふむからうすに目さむれは東しらける飯田町かな

寄樂庵祝

(0424) 卓子(しつほく)の四すみも腹におさまりて御代は太平樂庵の客

文字六といへる豐後節の浄瑠璃をかたれるもの仙臺淨る理をかたりけれは

(0425) 仙臺の言葉をうつす浄瑠璃もそのみちのくのしのふ文字六

芦に翡翠(かはせみ)画たる扇に

(0426) とりあへすよめる狂歌は難波江のよしやあしともまゝのかはせみ

歳　暮

(0427) 借錢をもちについたる年の尾や庭にこねとり門にかけとり

柳に馬のかたかきたるに

(0428) 青柳のあれたる駒はつなくとも咲た櫻の陰は御無用

小松引の画

(0429) 子日する野邊に小松の大臣は今に賢者のためしそひく

橋場の慶養寺に慶長のむかし袖をたち桃をわかちしちかひよりはかなくなりし二人の墓ありと聞て尋ねはへりしに此寺もとは淺草のみくらまへにありて其後龜戸村に移りまた今の地にうつれるよしにてそのおきつきところのあとたになしといふあまりにほゐなくて立いてつ二人の事は羅浮子の藻屑物語にみへたり

(0430) あとかたもなみの藻くつの物語今かきわけてとふかたそなき

朝とく野へをありきしにつりかね草といふくさをみて

(0431) 朝露にすはゝ　うこく風の間につりかね草を引あけてみむ

はしめて茶屋四郎次郎にあひてよみて遣しける

(0432) これはまたよい折鷹の茶屋氏におめにかゝるははつむかし哉

文月末竹本住太夫日くらしの里にいしふみをたてゝ先師政太夫十七回忌を
とふらひけるときやつかれもその會にまかりて

(0433) 此里の石の文月浄瑠理の世界にひゝく蜩（ひぐらし）のこゑ
十五夜月

(0434) 分厘の雲さへはれて算盤の玉の三五の十五夜の月
浦　月

(0435) 芝浦の獵師も網をうちわすれ月にはいとふいわし雲哉
月前神祇

(0436) □祭月の光を花たしともつて出たる男山かな
葉月いさよひの夜土山ぬしの宴にかめの子ざるにて龜の形をつくり浦嶋か
玉手箱とて翁せんへいの箱入をそへて出したるに

(0437) 玉手筥あけてくやしといふことか浦島臺にかめのこのざる
乘合船の画賛

(0438) はや船に乘合とこそ見へにけれ馬かた船頭おちこちの人
積病をやみて

(0439) 思ひきや我借錢のしやくならてわきせうもんにこはるへしとは
すまひ人谷風梶之助に遣しける

(0440) かたやくら巖石おとしさか落し關は日本一の谷風
鍋弦といへる組屋敷より鴨と酒を送られけれは

(0441) いりとりの鍋弦よりの御使に徳利の酒をくみやしき哉
歳　暮

(0442) 一ト おとり門の松坂またこへんやつとせいほのけふの御仕舞
木あみ會兼題船松飾

(0443) 猪牙舟やしりくめ繩を火繩にて二丁立たる松飾哉
浮瀬貝

(0444) 生酔と笑はゝわらへ味酒の身をすてゝこそ浮瀬の貝
寄化粧戀

(0445) 待□につけおくかねや口臙脂のあかぬわかれの名殘おしろい
すねくさをうれへ侍りし比

(0446) この比は世をすねくさのうみはてゝたゝ膏藥をねる斗也
蕣を唐詩選のこと葉にてよめともとめに

(0447) しらす心たれをかうらむ朝顔は只瑠璃こんのうるほへる露
氷室守を

(0448) 去年よりも氣をはりつめし氷室守こよひは心とけ〳〵　とねん

海邊七種　　知惠のないし

(0449) 打浪にへたのみるめをとり交て拍子もなつなすゝなすゝしろ
船松飾
(0450) 碇綱こくや霞のかゝり船しめはる風にそよく松竹
寄三輪初午
(0451) のむしるし目元もちろり神主は初午さけの三輪の杉樽
待桃花
(0452) けふもまた花は莟のむすひかみうすき毛もゝのはへさかりゐた
寄諷祝
(0453) さつく　と謠の聲も高砂の松のはやしを千年のいろ
隠家菜花
(0454) かくれ家は何もなたねの花をうへて捨しこかねの色をみる哉
垣本蛙
(0455) 蛙なく夕くれ竹の垣の本哥にたへなるねをはたさはや
山邊雉子
(0456) 山のへにすめとも歌の名なし雉子草のねをのみほろく　となく
卜者看花
(0457) 占ひもよし野の山の花見にはすゝむる酒のかんゐすいつく
藤寺首夏
(0458) 紫の根きしにすれる夏衣きてみるもんのさかり藤寺
牡　丹
(0459) 紅の日數もはつか草箒はくもましりて花はちりなし
寺茄子畠
(0460) 寺なれは朝夕めしのさいとして佛になすやうへておくらし
質屋虫干
(0461) 質藏に蟲ほし合のかし小袖あまのかはらに末はなかさん
刀鍛冶秋
(0462) 宗近か玉ちるはかり打つちのてむから秋の風はするとき
三六といへる信濃ものとしも十八なりけるか國へ歸るをよめる
(0463) 算盤のたまく　おきし三六か國へ歸るはにくの十八
おなしく
(0464) しなのものかへりの足はかるいさわ馴染うすゐの山こえて行
山家屁
(0465) やま住は屁をひるのみか夜は猶くさきの風の音斗なる
山中竹子
(0466) 奥山のやまのまたけの竹の子はうきふしくれのよにもかまはす
淺草霞
(0467) 淺草はおくらまへからうしろまて俵の山を霞こめたり

鶯

(0468) 先とくをとり屋の見世の鶯は高いかひてにあり月日ほし
寄葵車戀

(0469) 行めくりさふ日車の我戀は二葉よりこそ思ひかけしか
猫の子を鶏籠へいれたるを

(0470) 曉の時をはおのか目てしれと猫子にかこをかしはめんとり
破れたる衣を着侍りて

(0471) ふる小袖人のみるめも恥かしやむかししのふのうらの破れを
目黒紅葉狩

(0472) 道すから目黒歸の紅葉狩これもちめせと袂ひくなり
上野雪

(0473) 降積る雪にころけつこけ衣けさはあつまのひえまさるなり
貧家霰

(0474) あられほと金はたまらすいつのよにふる借錢をなすのしのはら
團扇合萬葉躰

(0475) うないらか寄てとらまくほしのこと古江の螢しりひかるみゆ
隅田川

(0476) きぬ〳〵のあしたの霜に似たり船月もすみたの水のおも楫
きさらき中頃牛込といへる所よりまれ人來り給ふみやけとて肴もたせ給ふとて狂歌給りぬれは御返しすとて

(0477) うらにのみいそのもくつのもくあみにかゝるおいてはたまさかなこと
ある人くしらのしといふものと一の森といへるちやをもて來りけれは

(0478) くしらのしつけてよい茶の一の森こゝろつくしのみやけもの哉
燕

(0479) はたをへるよふに飛かふつはくらは柳のいとによりつもとりつ

ものことの明輔

立　春

(0480) 初鶏のはやひとゝせの口明て音もけつこうな春は來にけり

(0481) かはらけのかはらぬ春にあふむ盃とゝをかゝあも酌かはすなり
海邊鶯

(0482) 鶯のはつ音か崎の朝風は門邊に船もつきひほしあみ
愛宕春

(0483) 愛宕から土器町へひら〳〵　となけの情の風に散るはな
潮に捨舟

(0484) うたかたの蚫に似たりさんちや舟潮の干かたへ吸つくた嶋
兩替屋暮春

(0485) 包みから八重山吹の新小判かはせく　に行春のいろ
寄源氏物語博奕
(0486) よいほとに勝てのきはの荻ならて夜さら博奕をうつせみの床
有政鹿嶋行を送る
(0487) 帆を懸てはしら鹿嶋の首途は船にのつとをあけ汐のとき
寄箔打戀
(0488) 金箔の寄そふこともかたけれは千々にくたくる胸の打盤
酔初鰹
(0489) 今更にくひてかへらぬ初鰹酔ふて天窓もうつき朔日
松魚の霜ふりといへるにてらしたるをたうへて
(0490) 夏の夜も霜降かゝる松の魚こからし味噌に舌をならして
早乙女戀
(0491) 早乙女は契り深田の二畝かけてはやうち解る笠の下紐
夏神祇
(0492) 夕されは蛍の尻の玉垣にてらすやふたつみつのともしひ
題指頭画
(0493) なひく　の繪嶋かあまの船よりも沖をこゆひのはしり書哉
待乳山
(0494) 眞乳山ゆふ□船の漕行はあたら詠もくさの庵崎
すみた川
(0495) 里人かあらへる鍋のすみた川汲てはめしを高瀬舟哉
寄寒垢離戀
(0496) かはらしと契りしかひもあら法師袖は泪のたきの水行
古寺屁
(0497) 屁をひれは音も高野の山彦に佛法僧とひゝく古寺
神樂女屁
(0498) 乙女子か屁をひるかえす舞の袖あたりもにほふ尻やかくら男
或人のもとめにいなみかたくてあやしの画のはしに書て遣しける
(0499) むかしく　あつた土佐繪の馬ならて抜出るうそを書たついたて
葉多の黒つら
羽子板夫婦
(0500) はこ板のひいふうふみつよつ五ッむつまし中についた羽子の子
高輪歸帆
(0501) 引揚て帆も高輪に出る船のかへるや浪のあわ上總から
寄吉原菊
(0502) すかゝきのうちにも作りかさりたるいおらん菊の花のよし原

木曾路兩替屋

(0503) 兩替にきそちとたゝく天秤もひゝく小玉の銀のかけはし
時致乳を呑所の繪に

(0504) 時致を膝にあけはのてふあひは乳くひのあまき老の子育
寄馬士三弦

(0505) 歸馬にのり地ひかせる馬士哥もひんどうさきの宿てつきさほ
朝比奈彈琴画に

(0506) あさいなの指に琴爪かけゑほししらへて唄ふ聲もよし秀
膏藥商へる家に立寄侍る折しも御能拝見の觸状持來りけるをあるし入道常閑かゝる業する身にかゝはれる事にはあらし隣へもてゆけといひけれは

(0507) 町役にあらねと君はかうやくや能のあるへき御觸をそみる
辛崎の松の下にて蕎麥たうへて

(0508) から崎やからみをかけてひとつ松くふたる蕎麥はひえの山もり

油のとうし練方

舟中婚禮

(0509) 婚禮はすみよし丸に眞帆あけて濱松風にひらきこそすれ
寄硯箱戀

(0510) 硯はこいまはかけこの中絶てこゝろほそさや筆の命毛
寄聲色戀

(0511) おもふことこはいろに出て恥しやさて其次は何をいふへき
雨降り侍る日墨田川のほとり雪見塚にてよめる

(0512) たゝひとり雪見にころふ所にてはやくおきなといふ人もなし

畑野畦みち

海邊七種

(0513) 七種をはやす若菜や和歌の浦よせてとんとゝ打かた男浪
船中松飾

(0514) 風をいのる出ふねのかさり松浦かた春たつけふの初荷とり楫
呉服屋中登

(0515) 中登りいまやと親はまつ坂のむかひの人をみや川の水

壷隱亭　常　閑

權右衞門といふ酒友約を背き來らさりけるを

(0516) はや五ツうつのに來ぬかこん右衞門かねて言葉のひゝき有しに
鷄をあつものにてうして酒のむ折しも心安きともの來りけれは其盃をさして

(0517) 肴にはとりわけてやろ其酒を飲かけてまつこゝへかう〳〵

草やの師あち

切通曉鐘

(0518) 揚弓の的もはつさて切とほしさても上手にいりあひの鐘

寄霰釜戀

(0519) 戀侘て今はあるにもあられ釜涌かへるむねを汲てくれかし

吉原菊

(0520) 衣紋坂そろひし菊のはな衣みな白妙の中の重陽

寄魚釋教

(0521) 極樂へ行たい人をすくふのは地引あみたの悲願なるへし

驛路霞

(0522) 雲助かくもをかすみの立場迄駕籠舁かたや春の曙

寄硯筥立秋

(0523) 硯はこ明てふたみの浦さひて筆のさやかに秋は來にけり

南樓月

(0524) こゝ袖か浦〳〵　遠く見通しの部屋もちの夜の月のかけ見世

辨天看花

(0525) つちのとの御酒をたうへてみる春は辯才天も花に酔ふらん

寄琵琶戀

(0526) 君待て夜もふくろからとり出す琵琶のねもせて心さはくり

鹿嶋旅行

(0527) かむなきは庭の朝露はらひして宿をかしまの花をみてくら

船中松飾

(0528) かさり竹ひと夜へさきに立春は松の葉こしの初日かきふね

船中初松魚

(0529) はつ鰹釣あけしほの舟の中棹をさしみに今やつくらん

しかつへの眞顔

樵夫酒盛

(0530) 斧の柄のくちへ出るまてしゐしはやこりても酒の止ぬ山人

野良猫懐旧

(0531) のら猫の忍ふこしかたこしなへらまたゝひ〳〵　におもひ出つゝ

小便提桶似潮竈といふことを

(0532) 小便もちかのうらにおく提桶のしほかまならてたるゝ夜すから

寄山雀□落戀

(0533) 山雀のくとき落せしひめくるみひやうたむ〳〵　と寝てかたらはや

無情を木綿に譬ふといふ題にて

(0534) 物さしのかね言も何頼むへきたらは（以下欠。一行脱落か）

十七回忌弔ふ夜に

(0535) とし月ははやき飛脚の十七夜あの世へとゝく御□讀せよ
西行忌

(0536) 水無月の望をまたてきさらきにきへしや雪のふしみ西行
寄竈神祇

(0537) ねき言のまゝなる神やおはすらん白ゆふめしのかゝる竈は
肴屋神祇

(0538) 和らける光をちりに交肴たゝうち鎰にかけて祭らん
上野子規

(0539) 雨雲のはるかうへのゝ時鳥かさの下寺さして聞ゆる
寄雛戀

(0540) 白酒のかたとき思ひわすれかねしのふ草餅いくよふる雛
汐干捨舟

(0541) むとくなるものは汐干のかたはにてあしなき船のいさりたにせす
算木あり政

船松飾

(0542) 松立し船の飾も大もつのうらしろねまつゆつり葉か嶽
山家婚禮

(0543) 婚禮に舅か腰も七まかり嫁の道具を脊屓つゝら折
藤寺首夏

(0544) けさよりも夏の衣はきにけりな八ッ藤寺にゆふ日さしぬき
寄葵車戀

(0545) 待侘て車長柄のうしや君けふあふ日にはむねもとゝろく
夢神祇

(0546) きよくすむ水を鏡に向嶋老も若葉の陰をみめくり
若水汲星

(0547) へつついの鍋かまくらの朝またきとし若水を汲星の井戸
寄錢戀

(0548) 契らすはかたみに袖を子母錢も君か心の替りせんとは
寄馬神祇

(0549) 追分の馬も三寶荒神にいさむ驛路の五十鈴かはら毛
やんことなき御方にて富士を画三組の大盃をつゝけさまにたうへて

(0550) いたゝくや三合五合七合と段〳〵　のほるふしの盃
三人寄は文殊の知惠といふ題にて

(0551) みたり居て油斷かならぬ知惠くらへさらは文殊の獅子てまいろう
牡　丹

(0552) 名にしおふ花の富貴ときくよりもとうから欲す深見草なり

題指頭画

(0553) 名も高根四季おり〳〵　のふしの繪をかくや日本一の親ゆひ

聞異見戀

(0554) 今ははや人のいけんも馬の耳そなたの風の便りまつ身は

海邊七種

(0555) 打寄る波の拍子も芝浦や舟から磯へ魚をはこへら

としの始に鏡にむかひて我天窓のよほとはけぬるを恨みてよめる

(0556) 正直の頭にうそをぬりつけてしりからはけるせいたいの春

初午近

(0557) 初午も日々に日比谷に近けれはやかて太鼓もとんからす森

ものことのうとき

洲崎にまかりて

(0558) 風をいたみ雨をいとひてさゝかにのくものすさきにかゝる釣舟

或人のもとにて瑟のことはりなととひ侍るにいかゝしたりけんとりあへねは

(0559) つめかけておしてとひきんするなれとからことといひて聞いれもせす

盂蘭盆會頃若僧達多く修行に出てかねうちならしあるは夕ねふつとて打つれてぞめく有様實末法の信うすきにやと

(0560) 僧達もうらほんのふや起るらん心もうはの空ねふつして

刀鍛冶秋

(0561) 打槌に秋のあらしのかよひきて木々のもろ葉を吹みたれ焼

寄壁塗懐旧

(0562) ねぬる夜の夢のすさみのゆめほともむかしにかへすうら壁も哉

鳴　海

(0563) 老のめも今そ霞まん東路やみゝのなるみのおきの春風

子安神社

(0564) 時を得て早苗とるなる小山田をこやすの神と聞そとふとき

しりはすといふ病をうけて

(0565) かゝるとは佛もしらし尻はすのうてなはさてもうたてかりけり

果報寐待

(0566) 果報をはねまちのはんのふくねつみ棚から落すほたもちも哉

小搖磯梅澤里にて

(0567) 箱根をもけふこゆるきのいそかれてにへ茶に水をむめ澤の里

狂言師納涼

(0568) 山ひとつあなたの峯の木間よりまかり出たる月のすゝしさ

寄鐵炮戀

(0569) 鐵炮のあてのはつれし玉章をみるもうらみの種か嶋哉

劍術者質置

(0570) 劍術者質の利足におはれてはゑいやつとうとうけつ流しつ

釼術師貧

(0571) 劔術師つかひ切たるはした錢これから質をおくの手もなし

寄鏡磨師懐舊

(0572) めもくもりふたへに腰もかゝみ研うつすむかしの姿見もかな

黒人の許よりまかれとて狂哥おこせたり折節打臥て有けれは

(0573) 梅干のすける心をたねとしてしはうちよりてやかてかたらん

人々歸りたる跡に主しらぬ扇の有けれはひらきみるつゐてに

(0574) うちつれて歸る拍子にこの扇とんとたいこのおとしつるかも

寄百萬遍戀

(0575) 墨ならて手をする念珠の玉章は百万遍をくりかへす書

辻　君

(0576) うたて人かさをかき根によるの君その夕顔のはなやおとさむ

大根ふとき

文月郭公

(0577) 郭公八千八聲あまりてやけふ文月のふみかけてなく

山中隱家

(0578) 借錢の山にすむ身のしつけさは二季より外にとふ人もなし

十二りつ圃

藤寺首夏

(0579) 根岸まてかゝりし松の藤寺に夏くる珠數の花の長房

出替戀

(0580) 年つみて思ひつめ茶の色深くいつ口きりと世を宇治のさと

山邊雉子

(0581) 煙たつ淺間山のへ雉子さへのほりかたのゝけん嶮岨なり

墨画松

(0582) 松に風ふくさ唐紙のひとはけは筆をふるゑの妙とこそきけ

待桃花

(0583) 待は猶はなの下迄長ふなり春の日もとの暮も遲咲

寄諷祝

(0584) 盃をさしから諷ひろんぎして機嫌上戸の祝ひくせよし

五　風

中の町の櫻といふことを

(0585) 中の町春は黄金の山櫻客は嵐と散すかみはな

春　庭　詠合毛氈盃

(0586) 花の客庭になかゐの日もくれて毛せん金のさかつきそさす

冬　野　詠合馬管笠

(0587) 冬の野に供のふり出す馬の先伊達をしくれのはれに菅笠

初雪に酒くむとて

(0588) けふのまん肴はいまた梢よりまつ降かけた雪のうすしほ

藤似振袖

(0589) 相合にかさをかりたや藤の花雨ふり袖のぬれた姿に

薄如老女

(0590) 秋の野にしらかのはゝと化たるは狐にあらぬ尾花なりけり

楓似猩々

(0591) 盃にうつらふ影は猩々の林かん酒て紅葉したかほ

座敷夏

(0592) 涼なからちよつとこい茶といふ坐鋪汗をふくさのあつい御馳走

部屋秋

(0593) ひとり飲部屋の夜さむの月の酒あたゝまる寝に秋風そ吹

溝杜若

(0594) 溝堀もすめは都のかきつはた江戸むらさきを花にかけたり

畑　鹿

(0595) 紅葉ちる畑は錦の敷ふとん着てねたそふに鹿そ鳴なる

一　樓

玄關春

(0596) 金屏の光りをかさる玄關は門に禮者をまつと竹の画

藪　鶯

(0597) 春は戸を明くれ竹に鶯の音も高やふにこめてこそきけ

幟　風

(0598) 紙幟立し鍾馗の追風は軒の瓦の鬼もおそれん

坐敷夏

(0599) 用心もあつさもなつの坐敷こそ戸さゝぬよゝの涼なるへし

藤似振袖

(0600) うつくしや紫鹿子ふり袖の雨を帶たる藤の花よめ

薄如老女

(0601) 花薄いとたをやめの秋更て霜のしらかをおひほうけぬる

菊　霜

(0602) 菊をおしと手折らぬ枝におく霜はいとゝ心のはなやいたまん

野　由

玄關春

(0603) 玄關は今朝はくわらりと明の春麻上下のきそ始めして
門松雪

(0604) ふりこんて來るは禮者の供廻り雪ももうけと門に松竹
子を抱なから蚊遣焚繪に

(0605) 焚なから抱子に乳をくれ合はなにやかやりの世話をしつの女
坐敷夏

(0606) 軒端より風鈴の音もちん坐敷涼しくなりし夏の夕くれ

橘　枝

人の大酒しけるを異見すとて

(0607) 實酒は憂を拂ふ箒なれとはいては塵に増るきたなさ
霜月朔日橘洲狂歌會へはしめてまかり蕎麥の出けれは

(0608) され哥にけふ顔見世の御馳走はうまいしうちの手折そはきり
萩寺へまかりて

(0609) とこもかもはきたらけなる秋の庭これもつゝれの錦とやみむ
端　午

(0610) 菖蒲まこも引そわつらふ花よりもやはりたんこの粽めにつく
寄醫者戀

(0611) 思ひ寢に引添たりし戀風を匕加減してまたもくとかむ

山手のある人

達　磨

(0612) 悟てもねてゐてすまぬ世なりとはしるか達磨もおきあかり小法師
宮古野といへる遊女とこのうへにて放屁しけれは

(0613) 青くさきならの都のやへさくらけふとこのうへに匂ひぬる哉
寄春夜醫者

(0614) 一時の千金方の朧月花のしたにて翼もそひつゝ

四樂齋

飛鳥川とよみけんむかしもしるく我藏もせにかへ侍れは雅子の坊か藏はと
とふに

(0615) 藏はなし爺か腹をは藏と見よ善をつみ置坊にゆすらん
妄語戒のこゝろを

(0616) 啌つけは閻魔か舌をぬくゝ　と啌てをしへし啌のいましめ

雄　珍

上戸客に雑煮を出してはらたちけれは酒出すとて

(0617) 餅あます客に盃とりあへすとその殘のかんを正月
人の菓子をぬすみおきけるをまた人にぬすまれしかは
(0618) 腹たゝすやうかんにんをしてみれはこれみなもとはたゝのまんぢう
針口のいたき
春秋音樂
(0619) 春秋のその折〳〵を越天樂花はチヒルラ月はテエルラ
野見直寢
立春
(0620) あら玉の門より開く扇子屋の末廣かりに聲も立春
黒栖の大せうひかる
題しらす
(0621) 世の中はとんと太鼓のかはりものとうなろとまゝ思ひすてゝん
北山象安
寄厠戀
(0622) たれこめて獨思ひをかけかねのうちあけられぬ戀の隱家
鬼守
海晏寺にて海を見やりて
(0623) 散紅葉茶屋も仕舞ふてたつた山あとに床机をおきつしら波
成笑
寄大工戀
(0624) さしつけてほそをかためぬ通路は心にふしんたてなからゆく
荒神の繪馬を
(0625) いつの時つくりとつけい荒神や一羽はかゝぬにはとりの繪馬
一蛙
菊霜
(0626) 朝おきの寢顔もみせぬ菊の花はや初霜のうす化粧して
水車
部屋秋
(0627) 入相のかねつつくりと居てきけは部屋のうちにも秋の夕くれ
浮木
梅如若衆
(0628) 色若衆おとらぬ梅の花盛みのなるほてもすいといはるゝ
田畑ものなり
糸とる女をみて
(0629) 世のわさの細くも糸をよる〳〵のねむけくるまにくたかけのなく
葉月三日月
(0630) 十五夜のはれを心にかけなから兎も波をはねて三日月
櫻のはねすみ
寄矢戀
(0631) 梓弓矢ふみまいらせ□□□封をきつてはなしてもみむ
寄茶碗戀
(0632) 思ひあふ仲人いらすの盃はいもせと燒の茶碗なりけり
霜降月はつの八日ほたけ祭とて宮路何某のかりにあつまりたはれ哥よめる
折から佐州公の御家何かし尋來るあいさつによめる
(0633) 相槌をふいこ祭にうち解ぬ鍛冶橋からの御客なりとて

寄垢無僧戀

(0634) 尺八の露も涙もほろ〳〵　とれんほ流しにうきめすこもり

寄袴着戀

(0635) 筒井つゝ五のころよりかはらしといひかはしたる言の葉かまき

寄凧戀

(0636) 戀風に凧のいとくるくり言は涙ふた手にしやくりあけつゝ

出家角力をとる

(0637) 出家としはつみにのりの花相撲うちわは西のかたにあくらん

酒屋煤掃

(0638) 挑燈のしるしも三輪の杉立るかとの酒屋の夜のすゝはき

彈琴舍　蒲　□

初午によめる

(0639) 初午の歌のよめぬは何のばちあたる太鼓のおのかどんから

若　菜

(0640) 君か爲雪かきわけて若菜をははゝかりなからつまみてそとる

社家の煤掃に

(0641) すゝはきは塵に交るかみ□頭巾にせよとゆふたすきかけ

下戸厄拂

(0642) 厄はらひ酒しのまねはしやうきゆへいかな鬼ても逃て行らん

木の名六ツによせて戀のこころを

(0643) 君まつ(松)とよしつけ(拓植)すともくるみ(胡桃楢)ならはやとへかし(樫)な更すき(杉)ぬまに

袖か浦にて

(0644) 世の人のみるめいとはすぬれてみん波のしらはの振袖か浦

ある方にて九十賀しけるとき和歌の題龜萬年友といふことを

(0645) 万代もよい中としを友としてむかし〳〵　をはなし龜かも

藪のうちのつはき

裡店冬籠

(0646) 山にいる心もなみのうら住居身をこもり江の寒さいとひて

船　君

(0647) まむちうの名に呼君か□小舟こはせいろうの藪ならぬ戀

貧　戀

(0648) よい中も悋氣のかとにわれ鍋のわれても末にあはんとち蓋

寄杖戀

(0649) 女房のとしは三ツ四ッたけの杖につかぬ中のふしも折〳〵

寄市戀

(0650) 賣かひの袖からそてへそれと名はたつの市女にくるふ秤め

寄十露盤戀

(0651) 氏なふてこは十露盤の玉のこし終にわりなきをなかとそなる

峰まつ風

櫻

(0652) 下戸ならぬこそ男なれ山櫻なとか團子を花に替へき

若　餅

(0653) 若餅をつくもゝとせの春までも腰のかゝみをのして祝はん

山寺待月出

(0654) 入相のかねてまつ間の程もなく目につきしろの端山寺哉

七夕素麺

(0655) たなはたの契も長き素麺ははた織姫の糸とみえたり

盆前詠

(0656) ちりく　とこの身につまるひきかへるぬりほん前の油あせして

獨身母衣蚊帳

(0657) 母衣かやに寢おきはやすし獨武者たれと組へき敵もなけれは

隔壁聞戀

(0658) 郭公鶯よりも聞たきはこかるゝ壁に耳よりのこゑ

古鐵の見多男

子　日

(0659) 春の日の長閑になれは氣を野へに孫や小松を引つれて行

霞

(0660) 佐保姫のむかふ鏡のやまの端に霞のまゆやつくり初けん

早　蕨

(0661) 春風を握りつめたる蕨手はやかてひらくる花の下陰

春　駒

(0662) 春駒の道もあし毛やひんく　とはねたる泥に尻をまくり毛

藤　花

(0663) 咲ふちのしなへもなかきはなの下あほらしくも詠めくらしつ

照　射

(0664) 五月闇とほしさす手に入佐山命おしかも運のつき弓

萩

(0665) 秋風に山の裾野を吹まくりあらはにみへる白はきの花

槿

(0666) 朝顔の開をみれは眼の藥やくし如来の瑠璃のつほみも

九月盡

(0667) 長月といへともはやく立田姫あき去衣ぬひあけもなし

時　雨

(0668) さらく　と落葉ましりのまさこ地は風の吹繪のかた時雨哉

霜

(0669) 木曾とのゝ陣屋ともみむ軒の妻巴も霜に薄化粧して

橘

(0670) 糸みちもまた水調子三味線のかはへかけたる岡崎の橋

懐　舊

(0671) てんく　をうちしつむりも赤本のむかしく　と也にける哉

元　日　　手からの岡持

(0672) 千さと迄かさりて年もくれ竹のよのまにとらの春はきにけり

人のもとへ美濃帋をこふとて

(0673) ふる筆の笠はあれともかみな月時雨をふせくみのをたまはれ

寄双六祝　　女里　曉

(0674) さいあれは一事か万事かなひ筒おもふ目出たきろくもおさめて

題しらす　　法橋吾山

(0675) 山雀の餌をあらそひて落るより老のくるみのせはしなの世や

臍に出來物いてきたる人によみて遣しける

(0676) 麻糸の淺き病とおほしめせたとへ臍にはうみたまるとも

寄簾戀　　馬　乳

(0677) 古簾青かりしより心にはかけてさらく　おもひわすれす

客來の折から味噌する音のきこゆれは

(0678) かすかなる勝手て味噌をすり鉢の忍とすれと音にいてにけり

橘洲のぬしをとひ侍りて挑灯かりける時詠ならひの口すさひ出すも恥あへす

(0679) 挑灯につり合もせぬ言の葉の恥をあかりへ出しかねたり

筆ゆふ翁を　　大泥のはね道

(0680) 眉におく霜の冬毛のしろく　と幾百對も長き命毛

卑賤の者の長壽をいわゐて

(0681) 瓢たんの輕き身なれと壽の百なりこそはめてたかりけれ

寄朝比奈門破戀

(0682) 明ぬ門破るも戀の手くたにて忍ひ逢ふ夜の首尾もよし秀

温　石

(0683) 夜もすから老の添寢の温石は我箱入のおもひものなり

寄連哥戀　　望月の秋よし

(0684) さり嫌ふ人の心のうらおもていつの折にかふすものにせん

世業しけき中をことにふれつゝ身のいとまをぬすみて此道にこゝろさし侍るとて

(0685) 盗人の名は立はたて和歌の浦花のしら波月のしらなみ

坐頭待春

(0686) 梅の花それともみえす匂ふより春は隣のかきのそき哉

十三夜

(0687) きぬかつくいもゝ今宵はいてゝみよ十とかそえて三栗の月

人の灸治せしをみて

(0688) 麻の中に交る蓬をすえぬれはすくに病をなをすとそきく

紀　迪

難波へまかりしとき森何かしのもとにて蕎麥のもてなしにあひて

(0689) 難波津に昨夜やくそく申たる蕎麥は今とそくふやこの腹

あるしの母返し

(0690) おかけんもあしかりぬへき難波津の賤か手もりのおそははつかし

寄海鼠戀

(0691) わらすへのゆふにいはれぬ思ひにはついになまこの身もきえぬへし

美濃近江の境ねものかたりにやとりし時

(0692) 先うれし近江表にみのふとんねものかたりにあひやとりして

釋迦詩を作るといふ題にて

(0693) 二四不同二六時中に作らるゝそのしゝくつに弟子をあつめて

祇園の社のほとりに田樂のくしをけつるを

(0694) 田樂は法師のわさときゝつるをなとくしけつる神の御前に

やことなき御方小鍛冶の能し玉ふとて御いたゝきの狐の落けるを御氣にかけさせ給へは

(0695) 冠につきし狐はおちにけり君か釼のとくに恐れて

三人寄は文殊智惠といふことを

(0696) 三人のむねをひとつにこねませて佛の智惠をまろめたしけり

遠ひ親類より近くの他人

(0697) 親類の遠き雲間の月よりも近きか花の壁隣かな

三疊のたゝ見

(0698) 門出に龜は万字の壽はこれを誠に御吉そう氏

莊萬字といへる人の他へ養子にいたりけふ引移の門出に龜の庭に出しを

雪隱華

(0699) 雪隱のもとにたれたる兒櫻いとなかしりの花のうつり香

須磨といふおうなのゆふへ夜もすからおきてありしゆへ今朝居眠し侍るといふに

(0700) 夜を一夜寢すにあかしの沖の浪今朝こき出る須磨のうら舟

寄花神祇

(0701) もろ〳〵　の不淨をよけし伊勢櫻てらすひるめのみことなる花

寄詩歳旦

(0702) 鶯もけふから歌の調高く韻字ふみしめし花の梅かえ
おなしく儒者によせて

(0703) 春はまた樂しからすや年始とてとも遠方より禮に來にけり
睦月二日濱邊黒人もとにて哥の會し侍けるとき芝浦早春といへることを

(0704) 芝浦や舟のさほ姫さし汐にきのふはつ日をによつとうみ面
海邊七種といへることを

(0705) 芝口やけふ七種の薺粥青うなはらにうちおさめたり
青山甲賀町を過侍けるに花の盛なれは

(0706) 春風にはなもたまらす匂ふなりおからか組の櫻さくころ
おなしく百人町の花を見て

(0707) 桃さくらみるに春日もくれそめてはなの外には松の青山
愛宕春

(0708) 山風の音そあたこの櫻川はなは天狗の名になかれたり
卜者看花

(0709) けふこすは翌は色香やそんの風乾爲天氣もよいはなの時
垣本蛙

(0710) なく蛙なれも哥人といはみのや名さへ高角神垣のもと
櫻

(0711) としふれはこしもかゝみの山櫻みるに目鏡のはなくもりして
寄花笑といへることを

(0712) 芳野山人の心もかたむけんひとたひ笑るはなの姿に
深窓聞郭公

(0713) 郭公なくやてつへんかけ香のかほりゆかしき初ねやの窓
卯月はつか本所みめくり稲荷社頭會夏神祇といへることを

(0714) みなロを祭る神垣みめくりて田子もとくをやとる早苗時
船頭夏書

(0715) 暑き日をしのきて夏書せんとふはふた親ふねのからのためかも
中洲納涼四季庵といへる茶屋にて

(0716) 川風の涼しき庵の見はらしは夏もなか洲のゆふ氣色哉
佛師歳暮

(0717) としの暮金をかすかのしりくらひ觀音もあり横に寢釋迦も
睦月はつかの日橘洲ぬしのいもとなる人十あまり七とせの忌になんあたる
日寄蕎麥懐舊といへることを

(0718) おもひ出る涙に袖をしほり汁しるしの石の音のむしそは
蛙面坊のぬしくもりし日雨具を携へ來りけれは

(0719) 雨の日をかねてやしりのあなかしこ其用心のかつは傘
或人のもとにて茶番といへるものし侍けるに鉢木といへる題にて梅松櫻炭
を景物に出しけるついてによめる
(0720) 吹おこす佐野ゝ渡りの家の風春まつ梅の花さくら炭
墨画松
(0721) 一筆てこれはすみの画高砂の相生の松をさつゝ　と書
河合の何かし龜を画侍る盃を送けれはよみて謝し侍ける
(0722) 御禮には心一はいたへ過てよろよろつ代の龜の盃
隅田川
(0723) 隅田川漕行舟の名をとはゝ梅若丸といふへかりける
天明はしめのとし卯月中のよかすみた川にてはりかねかしらおろし侍ると
きまかりてよみておくる
(0724) 世をそむくしるしみえたり正直の頭にやとるかみおろしゝて
橘洲ぬしの人のもとより瓢の烟草入をおくられけるとて出し人々に哥よま
せけるにおなしくよめる
(0725) ほつといふ息繼らうの長き日にたはこ一ふくふくへかりける
出替戀
(0726) ぬか味噌のくさきにもあらぬ竹のよのはしたと末を契る出替
茶摘戀
(0727) 今更に替る契は宇治の里うすきゑむ香の茶をや摘けん
寄葵車戀
(0728) 玉簾かけてあふ日のまち遠や髪化粧してかさりくるまは
寄松魚戀
(0729) 初鰹こゑ聞からしみそめては千代をふるせの後も契らん
夜廻祝
(0730) 時となく廻る雨たれ拍子木のうちしめりたる夜こそ安けれ
寄碇祝
(0731) 四方の海風おたやかな御代なれはこちも碇をおろしてそ居る

から衣橘洲

(0732) 百人一首のふるきもてあら玉の春のことくさとし侍るになん
(0733) けふ春になり平朝臣ちはやふる神代のまねをしめかさりして
先ひらく伊勢の大輔の初暦けふ九重も花の御江戸も
掛乞男の聲もはけしかれとはいのらぬものを
(0734) このくれはいつの俊頼うかりけるふる借錢の山おろしゝて
薺賣金ひらふ画に
(0735) 人の手にわたらぬさきとなつな賣とるやすてゝん天のたまもの

郭公松魚の優劣いかにといふ人に

(0736) いつれまけいつれかつをと郭公ともにはつねのたかうきこゆる

日本橋月

(0737) 雙六のふり出す雨ははれにけり月を乞目の日本橋より

三圍稲荷社頭會にて夏神祇といふ事を

(0738) 郭公田を見めくりの神かけて雨のふる句をふり出てやなく

隅田川

(0739) すみた川とほす花火やみやこ鳥橋と芦邊はあかほしの影

淺茅原

(0740) 手にとらぬはし場てくふた道艸は霧も淺茅かはらにたまらす

佃島夏秋

(0741) 五月蠅なす神もあつさも佃嶋浪の中臣はらふ夕は

木あみくへきやくを日比になれとこさりけれは

(0742) 山雀のそれならすして山の手にくるみをとらへまはすなるらん

寄花火戀

(0743) ものおもへは川の花火も我身よりほんと出たる玉やとそ見る

濱邊黒人きたりて一宿しつとめて前栽の芭蕉床夏蕣を三首によみて予にもすゝめけれは

(0744) ねふけれと芭蕉の露のおきて見んやつとこなつや花の朝□

蚊遣火

(0745) 木屑たいてあれたる宿のいふせきは蚊といふ鬼のすめはなりけり

寄山伏戀

(0746) せめかけてとう〳〵　いのりふせにけりいさ下紐をときんすゞ戀

寄蘿蔔戀

(0747) 夏たひに袖しほり汁からふしてしのふこゝろをねりま大根

寄鬼戀

(0748) 君すまは鬼か窟も怖うない命は何にせん丈か嶽

神主遁世

(0749) 神主も世を中臣のはらひすていまはあたまに髪とゝまらす

夜發述懐

(0750) 雨ふらぬ夜もたち君のくるしさは我みのかさをもちそわつらふ

何某の君六十の賀によみてたてまつる君横笛の妙手なり

(0751) 笛竹の千代の齡をえてん樂ふくもテラロラいき長くして

何かし翁六十の賀に狂言の末廣の繪に讃してともとめに　片岡君より

(0752) 鶴龜の齡を君にかすか山人か賀すなら我も賀そふよ

青木のぬしのしるよしゝたる玉川の里の蕎麥よとて手つから調したまへりけれは

(0753) ことにまた君か手作りさらく　とたへて疵なき玉川の蕎麥
芝浦の春日の社にまうて椽側にこしうちかけ海面の眺望し侍りしに社僧の
こゝろありて多葉粉盆を出しけれは
(0754) 多葉粉盆出してかすかの宮柱ふとまいりしもえんのはしゐか
發斑をわつらひて
(0755) □も手もかのこまたらになり平のうたてやてうとふし三里まて
唐子あまたのせて布袋の舟こく繪に
(0756) 打のせてほていもきけんとり楫は子寶船といふへかりかり
月中に兎のうすつく画に
(0757) 兎く　何うすつくそ十五夜のつきしらけたる影を見よとや
予か酒やめて侍りしとき寢惚に
(0758) サツマイモドラヤキマサニスベカラククラフベシナンスレゾヒトヘニ
甘藷鑼燒正須餐何爲偏止一抔寒□將市上三年酒不及胸中十露盤
返　し
(0759) 天作の御酒やめてより此おとこ先十露盤の玉に疵なし
六月のころある人のもとにて三番叟の稽古見侍りしに雨の降出けれは
(0760) 三番叟ふるはすゝしき雨なからもとの天氣におなをり□へ
哥比丘尼を
(0761) 歌ひくにくとけはさすか落髪のなこりゆかしき鬢さゝらかな
秤
(0762) かろくとも業の秤目おそるへしうき世三分五厘五躰は
七夕酒
(0763) ひとつうけて先ほし合のおさへたと月もさしたり天のかはらけ
七夕瓜
(0764) むかし誰ふたつの星となる子ふりうまきなかこの名にはたちけん
或人の子の出世のいわゐにいなたといへる魚をおくるとて
(0765) いなたまてなりあかりたるわかな子の出世は見えた御奉公鰤
等思兩人戀
(0766) 挾箱あかぬふたりは重荷なり前とうしろと兩懸にして
誤期變約戀
(0767) 今さらに雲の下帶ひきしめて月のさはりのふくことそうき
久しくおこたりて後先生をとひ侍るとて
(0768) はしめても尻のすはらぬ達磨哥これそ本來面目もなや
返　し　をしへ人
(0769) たるま哥九年に三度やめるとも本來空になりてはしめよ
櫻
(0770) 見た所瓜をふたつにさくら花ようにはの雪峯の白雲

圓位上人の画柳に清水あり

(0771) 行水にうつる一樹の影法師これそ他生のえん位上人

臺所祝

(0772) 臺所とんとゝなるは瀧の水出入客もたえすとふたり

山下傀儡

(0773) 迷ふとも色即是空佛店あし二筋の道にとゝめん

都の水菜漬をもらひてたうへるとて

(0774) 縁なれや都からこしいひなつけあつまの人のさいにもらふは

雪隠待戀

(0775) ふみ板をまたく心をはせをりあけて天のかはやにあふ瀬をそまつ

布袋の画に

(0776) ぬの袋中は本來空にして子煩脳こそ即菩薩なれ

四方の赤良へ海老をおくるとて

(0777) 幾とせもかはらて見まくほし月夜鎌倉海老の腰折の友

旅立灸治

(0778) 出たちに先足柄のやまひきり三里やふしの根きりはつきり

老人戀

(0779) 憂人におもひつかれぬ鳩の杖年寄こひといつかよはれん

海邊七種

(0780) 江の嶋や俎板石に七種をすてゝん天女うつ波の音

酒百藥長

(0781) 百藥のてうとうけたるくすり酒のんてゆらゆら　ゆらく玉の緒

やことなき御方より五十首狂哥に點あへてとこし玉ふる中に御側遣ひの小童に土鍋にていもを烹させたまふに土鍋のわれけれは

筒井筒五つになりし此土鍋われにけらしないもにるさまに

右御哥のかたへにかきつく

(0782) くらへ見よとりわけしもの七文字は君ならすして誰かおくへき

室の梅といへる茶なりとて客人に出しけるにあらぬしふ茶なりけれは

(0783) 梅か香としふゝ　なからきこしめせよしあしくほの名にはたつとも

儒者何某のもとの梅の花盛にまかりて

(0784) 花もまた時なるかなや此梅は三たひかいてもたちうかりけり

玉川蕎麥をいわゐて

(0785) 千秋といはふて腹におさめたりこれうちはこの玉川の蕎麥

ある人茶番といへる戯れことをすとて枕双紙と題しみす紙を草紙にとちて出しけれは

(0786) 香爐峯の雪より高き御趣向はみすもあけたり味噌もあけたり

狂歌の点こひに賀邸先生をせめて

(0787) あし曳のやまひ哥ゆへさしもくさ火のつく斗点をこそたへ
扇面に水流て裏に螢ひとつある画に
(0788) 行水に數をはかゝて只ひとつちよると螢の影を寫し繪
初午ちかつく比隣家の梅を見て
(0789) 初午はちかき隣のはやしより時しる梅か香もかくら堂
山の手の月二首
(0790) 秋の夜の月は赤坂四ッ谷なるくらやみ坂もこえぬへらなり
(0791) 月見酒下戸と上戸の顔見れは赤坂もあり青山もあり
つちのとの元日
(0792) 明にけりうち出見よや大黒の手にまかせたるつちのとの春
年内立春
(0793) 行年の中おしわけて權柄に春の先追ふはるはきにけり
歳暮
(0794) ゆく年のかけはいかほととりかなく吾妻からけのあしおもけなり
何かしの尊堂百ひとつの賀に
(0795) めつらしや冬瓜の花のそれならて人の齡も百ひとつとは
片田舎といへる狂歌集の奥に予か狂歌そふへきよしもとめに
(0796) 片田舎見れはわらひも穂に出ぬ狂歌の作も出來秋にして
松江侯の壽藏によめて奉るへきよし人して仰ことあれは
(0797) 万年の後のしるしの石はこれ龜の尾山の置土産かも
外に六首たてまつりしおくに
(0798) おそれありすくにはゆかぬねちけ歌さまもあしまの蟹の横はひ
嵩松かすみた川にて落髪し侍りしとき
(0799) 中〳〵に梅若やきて見ゆるかな君は柳の髪をおろして
鴈奴か一周忌追福嵩松亭にて寄柏餅懐舊といふことを
(0800) こそのけふ君は佛になら坂やこの手合せてなつかしわ餅
寄松魚戀
(0801) 君か名も我名も棒にふる松魚わたりの人の口にかゝりて
狂言師某を悼て
(0802) やるまいそやるまいものを誰かあるとらへてくれよ死出の山人
竹林麥のふるまひにまかりて
(0803) 賢人の數ならねともまいりたり竹林麥のめしにあふとて
ある人井出の山吹と包紙に題して出せしをひらき見れはふきなりけれは
(0804) つゝみても井出のさとれとたまはりし此山吹はくはせものなり
寄花出替
(0805) 散花のなこりおしうのひまとりて風の宿やへねにかへるなり
待桃花

(0806) 待ほとのとをきは花のかさり雛十二ひとへや七重八重桃
卜者見花
(0807) 見る花に先雨風の卦はなしとさすや春日のうらく　やさん
垣本蛙
(0808) 天までもきこえあけんとなく蛙ならふや歌をかきのもとにて
山邊雉
(0809) 雲にいる雲雀のしもにたゝんことかた山のへの雉子なく聲
出替戀
(0810) 難面しやなこりを□□□□□□にあとしら山とかへるこしもと
茶摘戀
(0811) あひかたみ茶にもうき身をつみてしれ戀しからきのからき思ひは
赤良のぬしこの比され哥にすさめかちなるにおひの雲助のぬしの哥口をかんして
(0812) され哥に秋の紅葉のあからよりはなも高雄のみねの雲助
墨繪松　あるし嵩松英流の画に名あり
(0813) 十かへりのはなふさ流は目にたちてかくともつきし一筆の松
愛　宕　春二首
(0814) 高慢の花や見るらん愛宕山春にめを出す木葉天狗も
(0815) 江戸櫻名たかきはなのさきに見てさそなあたこは天狗酒宴
目黒暮春
(0816) ちか道を夏のこんから童子やら目黒は野への草もせいたか
晴天傘
(0817) 下駄の音もかんら傘玉鉾の見ちかへ日和さすか恥し
藤寺首夏
(0818) 灌佛もけふよりちかく見る花は天にも地にもなつの藤寺
待乳山郭公
(0819) 待乳山までは甘露の郭公あまけつく日の夕こしてなく
ある人の女結納のいわゐ□に晴天なれは
(0820) 晴天に先婚姻のとり組もよしやすまひのうちわ酒宴
はや冬枯の宿のいとわひしきに質におくへきものかしてよといひこせし人になきよしをいふとて
(0821) 我たにも秋はてし宿の冬枯は霜のおくへきしち草もなし
老人目鏡かけて月見る画に
(0822) 出る月を外山のはなにかけて見る老は目鏡の塵もくもらす
村　社
(0823) 笛太鼓はやしの中の神祭とつは日和をいのる一村
尾州名護屋にある叔父のもとより久しくをとつれなけれは

(0824) 我母のかたわれ月はいかにやとたよりなこやの空をこそ見れ
雪の日友人のもとよりふくと汁たへにこよとありけれは
(0825) いのちこそ鵝毛にゝたれなんのそのいさ鰒くひにゆきのふるまい
夫婦なから上戸にて夜〻　酒くむを見て
(0826) さかつきに三つよつ五ッむつこともふかくなる夜のいもせ酒宴
としよりてはや三十九なりといひ侍れは小女の三十九しやもの花しやもの
と唄ひけれは
(0827) とし とれは三十九しやもの花の春花はやらすとみはもちぬへし
ものくさき男みつから懶惰坊(アンヂヤウハウ)と名乗居間の額に一首とのそむに
(0828) 拂はねはちりにましわるふしやう坊そこる心のたか箒木なり
九月盡の夜管江來りてこよひ新宿へゆくといふに　新宿は江都の西にあたりて傀儡あ
またなり
(0829) 長月もこよひつくしに行客は西こそ秋のとまりなりけれ
かせくに追つく貧乏なし
(0830) 片荷つるてんひんほうも追つかすかせいて汗をふくの神には
對雨待郭公
(0831) 郭公すまのあまりに遲けれはけふもまつ風村雨の空
旋頭哥一首
寄諷祝
(0832) よいときにあふ玉にてや其玉簾のかゝる世にすむやうれしきすむそうれしき
寄地獄戀
(0833) いひよれとまゝにならくの底こゝろうちあけとんとくとき落さん
寄餓鬼戀
(0834) 身はやせて骨とかはりし契よりもゆる思ひにものもくはれす
寄畜生戀
(0835) 落ちらほうき名とらの尾文かいてこはく　なからおくり狼
寄修羅戀
(0836) 疑をはらふつるきをうけとめよ我ときる指我ときる髪
寄人戀
(0837) さめぬうち契れこの世はかり枕あたまてしれた梦の雲助
寄天戀
(0838) 羽衣のうらみかけてもなひくことかなふましとてたちのくそうき
寄塵神祇
(0839) 箒木さきまはり合もよくなりぬ塵にましはる神を祈て
四の海靜にして鉋屑ほとの浪もたゝねは八嶋のほかも碇おろして大船のゆ
たけき御代に生れあふたのしさ煉瓦たかき人々はいふもさらにて十露盤の
玉のかすならぬ身まてこの東都にすみとすめる人井を堀すして玉川のきよ

きなかれをくみ田つくらすして万國のたなつものあくまてくらひはら鼓うちて撃壊のされ歌ちまたにうたひ家〻　に和するも實この道のおもておこすへきときいたれりと此集撰おはりしよろこひにれいのこれかれ茅屋にあつまりて祝のうたあまたよみ侍りし中に　寄酒宴祝といふことを

(0840)　酒宴をしつのをたまきくりことも御代はめてたや〻

天明三年癸卯正月穀旦

京二條通新町東江入　武村嘉兵衛
大阪心齊橋南壹丁目　敦賀屋九兵衛
江戸日本橋通三丁目　前川六左衛門
同　四谷伊賀町　近江屋本十郎板